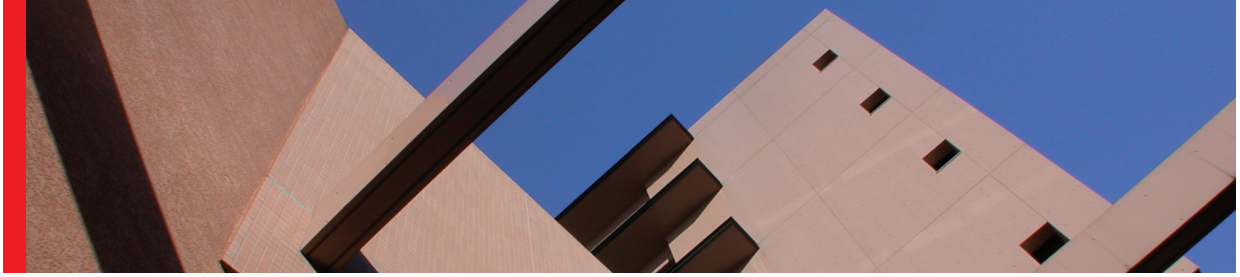


所長あいさつ

アジア・アフリカ言語文化研究所所長
大塚 和夫

グローバリズム論でしばしば見落とされがちな アジア・アフリカに住む人々の生活の実態を研究すること

アジア・アフリカ言語文化研究所は、アジア・アフリカの言語・文化に関する総合的研究を目指して1964年に開設されました。あたかも高度成長の真っ只中、東京オリンピックが開催された年でもあります。以来、国内の大学・研究所等に属す研究者との連携・協力に基づいた「全国共同利用研究所」として、アジア・アフリカ研究の第一線で活動を行なってきました。国内外の研究者を集めた共同研究・シンポジウム、海外調査の組織化、研究資料の蓄積と公開、さまざまな言語や地域研究の研修、辞典・語彙集の編纂などです。2005年度にはベイルートに研究拠点も開設しました。2004年に本研究所の属する東京外国語大学は国立大学法人になりましたが、全国共同利用研究所という本研究所の位置づけは変わっておりません。

近年、「グローバル化」によって世界の人々の生活様式が均質化されると喧伝されています。人間、物資、情報などの移動・流通・伝達が加速かつ効率化され、とくに都市部では類似したライフ・スタイルがみられるようになったことは確かです。しかしそれは、世界が単一の文化、ましてや唯一の言語で覆われることを意味してはいません。むしろ「グローバル化」の時代であるからこそ「文明の衝突」が論じられ、危機言語などといった問題が顕在化してきているといえましょう。いまや65億ほどの地球（グローブ）に暮らす人々の多様な言語・文化のあり方、とりわけグローバリズム論でしばしば見落されがちなアジア・アフリカに住む人々の生活の実態を研究することの重要性と必要性はいっそう増しているのです。

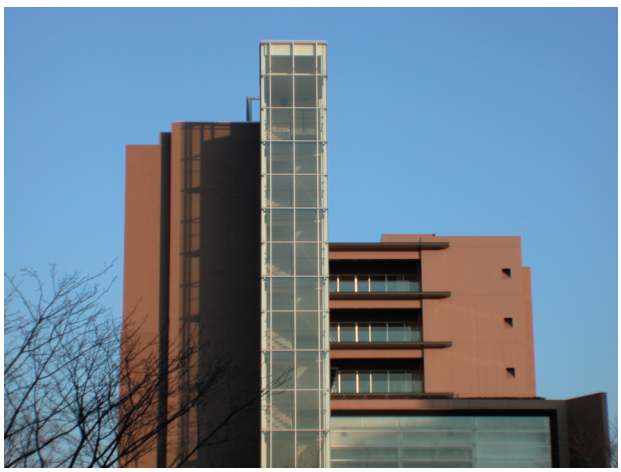
日本の高等教育体制も動いています。本研究所が開設された頃には同年代の0.5%強であった大学院進学率が、今では５％弱になっています。時代の波は研究環境にも及び、とくに国立大学の法人化は、研究資金の獲得をはじめ研究所の運営・活動にも大きな影響を与えています。このような現状に向き合いながら、本研究所は全国に開かれたアジア・アフリカ研究の拠点として基礎研究を積み重ね、その成果を研究者コミュニティ、さらに広く社会へと還元していく所存です。皆様のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

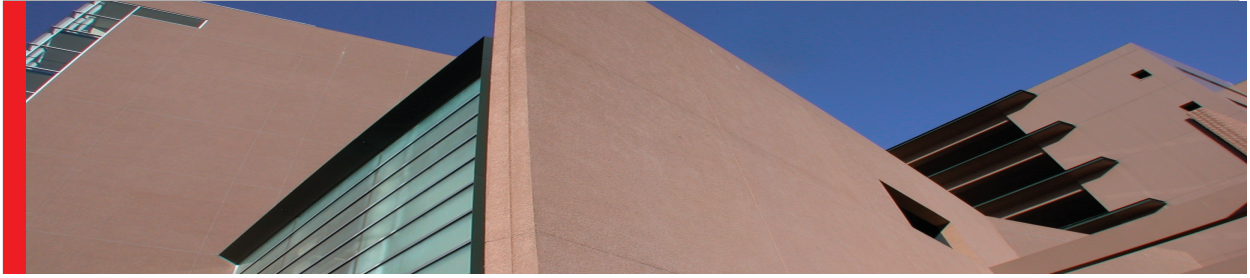
沿 革

年　度	事　　項
1961（S36）	日本学術会議がアジア・アフリカ諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告。
1964（S39）	アジア・アフリカ言語文化研究所が東京外国語大学に附置。 わが国最初の人文科学・社会科学系共同利用研究所。
1967（S42）	研究未開発地域への助手等の現地投入を開始。
1974（S49）	言語研修を本格的に開始。
1978（S53）	メインフレーム・コンピュータを導入。
1983（S58）	海外学術調査（当時、国際学術研究）総括班の事務局が置かれる。
1991（H3）	研究体制の抜本的見直しをおこない、従来の小部門制（及び１客員部門）から ４大部門制（及び１客員部門）をとる。
1992（H4）	東京外国語大学に大学院地域文化研究科博士後期課程が設置されたのに伴い、 大学院地域文化研究科にAA研コース会議を設置。
1995（H7）	文部省から「卓越した研究拠点（COE）」に指定される。
1996（H8）	COEとして初の国際シンポジウム「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」を開催。
1997（H9）	附属情報資源利用研究センターを設置。
2001（H13）	中核的研究拠点形成プログラム（2002年度に文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行） 「アジア書字コーパス拠点」が発足。（～2005年）
2002（H14）	旧西ヶ原キャンパスから現在の府中キャンパスに移転。 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築 ー象徴系と生態系の関連をとおして」が発足。（～2006年）
2004（H16）	東京外国語大学、国立大学法人になる。
2005（H17）	複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置。 フィールドサイエンス企画研究センターを設置。 中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始。 中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設。

■歴代所長

岡　正雄	1964年ー1972年
徳永康元	1972年ー1974年
北村　甫	1974年ー1983年
梅田博之	1983年ー1989年
山口昌男	1989年ー1991年
上岡弘二	1991年ー1995年
池端雪浦	1995年ー1997年
石井　溥	1997年ー2001年
宮崎恒二	2001年ー2005年
内堀基光	2005年ー2006年
大塚和夫	2006年ー





研究所の基本目標

発足当初の本研究所の設置目的は、(1)アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究、(2)アジア・アフリカ諸言語の辞典編纂、(3)アジア・アフリカ諸言語の教育訓練の3つでした。

設立後40年を経て、アジア・アフリカ地域の政治・経済・社会の急激な変化や、既存の研究分野を乗り越えた新しい学問・理論構築の要請、情報処理技術の革新といった状況の変化を承け、当初の設置目的を現時点に即して見直すことが必要となりました。

2004年4月の国立大学法人化に際し、これまで以上に、日本のそして国際的な人文社会科学研究をリードする研究拠点としての役割を強化していく期待が寄せられていることに鑑み、本研究所では、これまでの設置目的を発展させ、以下の長期的な基本目標を掲げることとしました。

長期的な基本目標

1 臨地研究(フィールドサイエンス)を核とした国際的研究拠点として国際的水準の研究を先導するにふさわしい研究領域を設定し、国内外の共同研究プロジェクトを推進する。

2 アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資料・情報を研究資源として利用可能な形に編纂し、それを国際的に共有するための研究資源拠点としての活動を進める。

3 国内外の後継研究者の養成に努めるため、研究所の創設以来の歴史を持つ言語研修・研究技術研修・出版・広報活動の、いっそうの充実を図る。

ミャンマー連邦パガン、アーナンダ寺院　撮影者：澤田英夫

これらの基本目標を遂行するために、次の三つの戦略的な研究軸に基づいて、動態的な研究活動を推進します。

戦略的な研究軸

■言語態に関する基礎研究

言語を常に人間のコミュニケーション文化の中で捉え、臨地研究(フィールドサイエンス)の成果とそのコーパス化による実証的な研究を基盤として、言語情報科学の成果を活用しつつ、従来の言語学の方法論および言語観自体をも基礎から問い直すに至る根幹的な研究を推進する。

■地域生成に関する研究

人間が活動し、社会関係を成り立たせる場として地域をとらえ、多様な伸縮性に富む地域の生成過程のダイナミズムを研究し、現代のアジア・アフリカで生起する諸問題に対し、時間軸を重視しつつ複眼的視座を提供する。

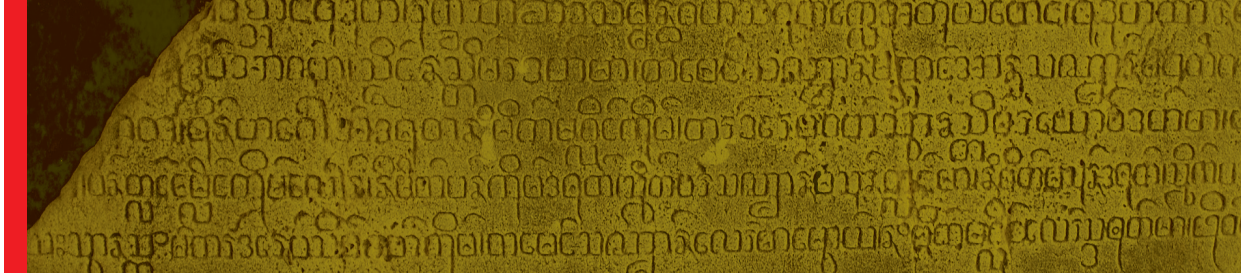
■文化の伝承と形成に関する基礎研究

人間文化のアジア・アフリカ諸社会における現実態について、フィールドワークに基づきミクロおよびマクロな観点からの実証的研究を行うとともに、人類史的視野の中で文化の理論的探究を行う。

三つの研究軸を具体化させた中期計画・中期目標に基づいて、所員が活動の単位である「研究ユニット」に所属し、所内での共同研究を実施します。さらに、「研究ユニット」の活動にふさわしい「共同研究プロジェクト」を立ち上げることによって、国内外のそれぞれの研究領域において最先端の研究を行っている研究者を共同研究員として委嘱し、アジア・アフリカの言語・文化についての先導的な共同研究を推進します。

情報資源利用研究センターに所属する所員は、研究ユニットに関わる所員と同様に、共同研究を展開するとともに、所内外の研究における情報資源の蓄積・加工・公開と、それを利用した共同研究手法の開発も行います。

フィールドサイエンス研究企画センター所属の所員も、共同研究のほかに、現地研究を主体とするフィールドサイエンスの視点から、研究および研究企画を行っていきます。



研究組織構成

外部委員会

- 運営諮問委員会 (p.6)
- 共同利用委員会 (p.6)
  - 研修専門委員会
  - 海外学術総括班専門委員会
- 編集委員会 (p.40)

チェック・評価

AA研内組織

- 所長
- 教授会
- IRCセンター長
- FSCセンター長（兼 中東研究日本センター長）

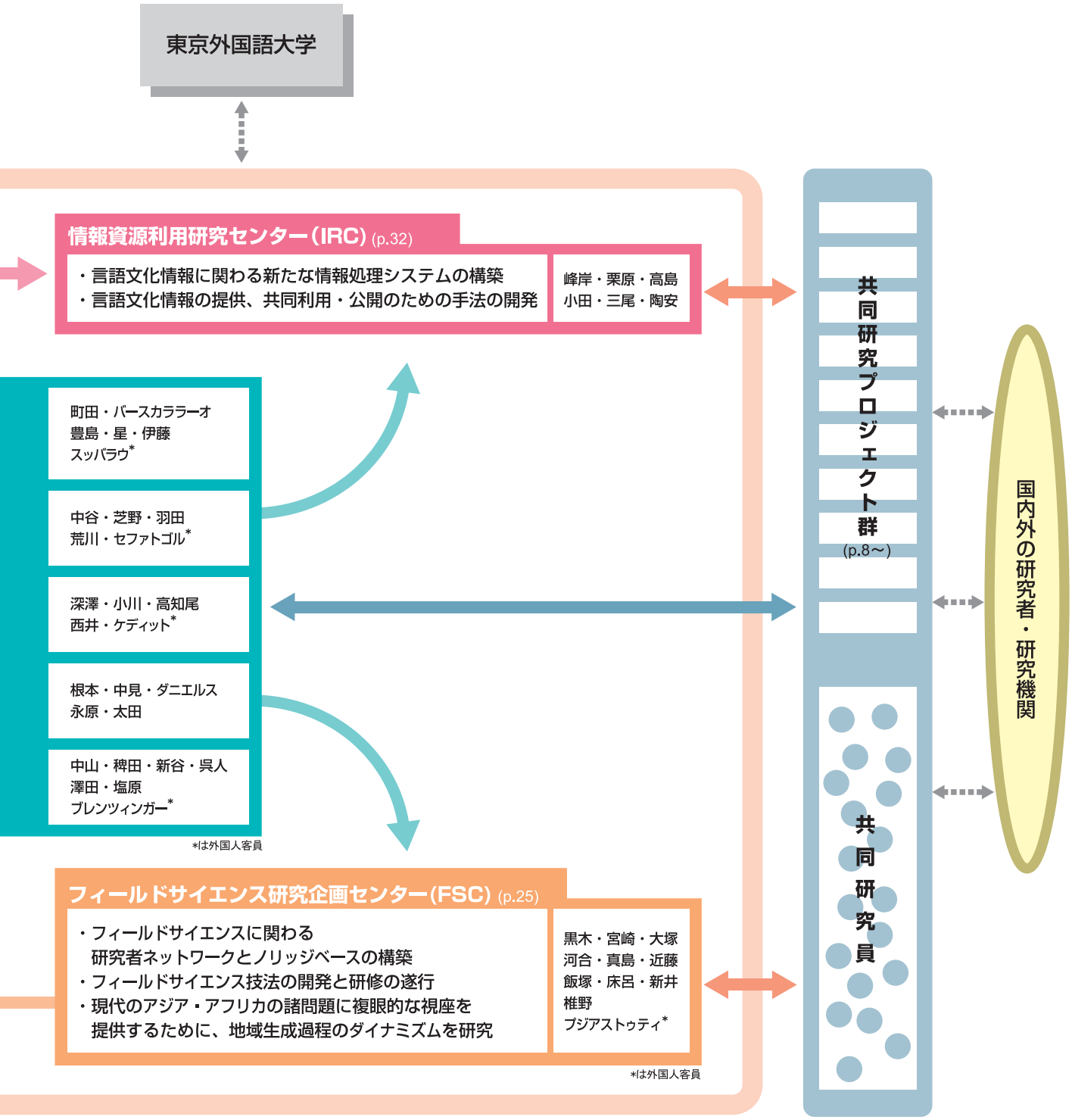
プロジェクト研究部

情報資源戦略研究ユニット	・言語文化情報に関わる新たな情報処理システムの構築 ・言語文化情報の提供、共同利用･公開のための手法の開発（アジア書字コーパス拠点（GICAS）担当ユニット）
コーパス研究ユニット	・アジア･アフリカ言語文化情報の分析･処理システムの構築およびそれに基づく言語文化の理論化
文化動態研究ユニット	・フィールドワークに基づいた人間文化の現実態の実証的研究 ・人類史的視野の中での文化の理論的探究
政治文化研究ユニット	・通時的視点からみた国家と地域における政治をその背景をなす文化の分析を通じて解明
言語動態研究ユニット	・フィールドワークに基づく実証的研究を基盤とした言語記述の方法論に関する根幹的な研究

■人員構成

区分	教授	助教授	助手	外国人研究員	非常勤研究員	共同研究員	フェロー	計
現員	18	17	5	5	7	353	8	414

・共同研究員は延数　・フェローは日本学術振興会PDを含む（2006年4月1日現在）



研究および運営に関する評価体制

■運営諮問委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての機能を適切に遂行するために、これとは別に運営諮問委員会が置かれ、研究所の運営の基本的・長期的方針などの重要事項について、所長の諮問に応えます。

所外(学外)の委員約10名によって構成されます。2005年４月～2007年３月の運営諮問委員は次のとおりです。

飯塚利昭(大修館書店編集第二部部長)
立本成文(中部大学国際関係学部教授)
上野善道(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
長野泰彦(人間文化研究機構理事)
西田利貞(財団法人日本モンキーセンター所長)
倉沢愛子(慶応義塾大学経済学部教授)
原ひろ子(城西国際大学教授)
斉藤　修(一橋大学経済研究所教授)
渡邉興亜(総合研究大学院大学監事)
清水建宇(朝日新聞社論説室論説委員)

■共同利用委員会

研究所の共同利用に関して、研究者コミュニティによる透明性を持った運用体制を実現するため、所内外からの委員からなる共同利用委員会が置かれています。所外(学内者を含む)の委員約７名によって構成される親委員会と、不定数の専門委員によって構成される「研修専門委員会」および「海外学術総括班専門委員会」から成ります。

2006年４月―2007年３月の共同利用委員は次のとおりです。

□共同利用委員会(親委員会)

新井政美(東京外国語大学外国語学部教授)
佐藤洋一郎(総合地球環境学研究所教授)
家田修(北海道大学スラブ研究センター教授)
庄垣内正弘(京都産業大学文化学部教授)
栗本英世(大阪大学大学院人間科学研究科教授)
水島司(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
小長谷有紀(国立民族学博物館・教授)

□研修専門委員会

橋本勝(大阪外国語大学外国語学部教授)
藪司郎(大阪外国語大学外国語学部教授)
梶茂樹(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授)＊
江畑冬生(東京大学大学院人文社会系研究科大学院生)＊
岸田文隆(大阪外国語大学外国語学部助教授)＊
(＊の任期は2005年12月～2006年11月)

ベトナム共和国ダナン、チャム彫刻博物館庭、彫刻や破片
撮影者：澤田英夫

□海外学術総括班専門委員会

伊藤元己(東京大学大学院総合文化研究科助教授)
佐藤洋一郎(総合地球環境学研究所教授)
梅崎昌裕(東京大学大学院医学系研究科助教授)
徳留信寛(名古屋市立大学医学部教授)
木村秀雄(東京大学大学院総合文化研究科教授)
本山秀明(国立極地研究所助教授)
河野泰之(京都大学東南アジア研究所助教授)
安成哲三(名古屋大学地球水循環研究センター教授)

■その他外部評価

(１)全所評価

３年ないし４年に１度の頻度で、所外の研究者数名による所全体としての研究活動、共同利用に関する評価を受けます。評価結果は公表されます。

(２)教員研究活動評価

教授昇進後７年を経た時点で、個々の教員は研究業績評価を受けます。評価結果は公表されます。

レバノン共和国ベイルート
撮影者：黒木英充

臨地研究に基づく研究拠点

フィールドワークにもとづくミクロとマクロの視点からの実証的研究

■共同研究プロジェクト……08
重点共同研究プロジェクト……09
一般共同研究プロジェクト……10
所外代表による共同研究プロジェクト……19
■研究者招へい ……20
■シンポジウム ……21
■外国研究機関との共同研究 ……23
■フィールドサイエンス研究企画センター(FSC) … 25
■中東イスラーム研究教育プロジェクト(MEIS) … 26
■中東研究日本センター(JaCMES) ……27
■研究未開発言語文化の調査事業 ……28
■競争的研究経費などによる研究 ……29
■資源の分配と共有に関する
人類学的統合領域の構築
～象徴系と生態系の連関をとおして ……30

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約480点余りにおよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996年度からは、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するプロジェクトに重点的に予算を配分し、重点プロジェクトと位置づけて運営することになりました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。さらに1997年度には、「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、2000年度には、「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」、2005年には、「言語の構造的多様性と言語理論」が組織されました。

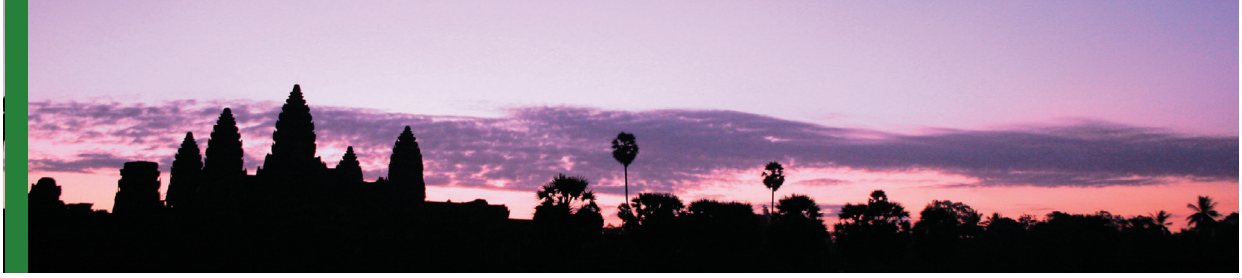
さらに2000年度からは、究所の共同利用性を高めるために、専門知識を有する所外の研究者に代表をお願いして運営するプロジェクトを開始しました。これまでに、「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」などが実施され、2006年度は所外の研究者を代表とするプロジェクトが２つ実施されます。

現在進行中のプロジェクトは次のとおりです。

（単位：万円）

	プロジェクト名	年度	主査／所外代表	人数			主に関連するユニット／センター	予算
				所内	所外	合計		
重点	言語の構造的多様性と言語理論 ー「語」の内部構造と統語機能を中心に	'05-'09	中山俊秀	6	5	11	言語動態	250
一般	朝鮮語史研究	'05-'08	伊藤智ゆき	2	9	11	情報資源戦略	52
	宣教に伴う言語学	'06-'08	豊島正之	1	3	4	情報資源戦略	53
	イスラーム写本・文書資料の総合的研究*	'03-'06	羽田亨一	5	23	28	コーパス	120
	地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究	'04-'06	中谷英明	11	47	58	コーパス	240
	中国系移民の土着化/クレオール化/ 華人化についての人類学的研究	'03-'07	三尾裕子	2	19	21	文化動態	120
	人類社会の進化史的基盤研究（1）	'05-'09	河合香吏	3	15	18	文化動態	60
	表象に関する総合的研究	'06-'08	高知尾仁	4	7	11	文化動態	32
	マルセル・モース研究ー社会・交換・組合	'06-'09	真島一郎	3	4	7	文化動態	62
	東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」*	'04-'07	黒木英充	4	21	25	文化動態/FSC	75
	マレー世界における地方文化*	'05-'09	新井和広	5	21	26	文化動態/FSC	150
	ムスリムの生活世界とその変容 ーフィールドの視点から*	'05-'09	大塚和夫	8	31	39	文化動態/FSC	232
	ドイモイの歴史的考察	'04-'06	栗原浩英	2	7	9	政治文化	30
	「植民地責任」論からみる 脱植民地化の比較歴史学的研究	'04-'06	永原陽子	1	22	23	政治文化	100
	東アジアの社会変容と国際環境	'06-'10	中見立夫	3	33	36	政治文化	50
	タイ文化圏における山地民の歴史的研究 ー総合的概念を確立するための手法開発	'06-'10	クリスチャン・ダニエルス	4	6	10	政治文化	85
	形態・統語分析におけるambiguity（曖昧性） ー通言語的アプローチー	'05-'06	呉人徳司	7	25	32	言語動態	200
所外代表	インドネシアの国語攻策と言語状況の変化	'06-'07	森山幹弘	2	7	9	政治文化	62
	音韻に関する通言語的研究	'04-'06	梶茂樹	12	48	60	言語動態	150

＊は、中東イスラーム研究教育プロジェクト（p. 26）とも関わりを持つプロジェクト。



共同研究プロジェクト

重点共同研究プロジェクト

言語の構造的多様性と言語理論
―「語」の内部構造と統語機能を中心に

「語」は人間言語に普遍の重要な構造単位・ドメインであることは異論の余地のないところである。しかしながら、最近の統語法中心の理論的言語研究の中では、「語」といえば、それが対外的に持つ統語機能ばかりに関心が払われ、「語」に直接焦点が当てられることはあまりなかった。これまで広く研究されてきた西欧大言語では文法体系における統語法の機能的役割が比較的大きいことも、この研究上の偏りを後押しした部分があろう。

「語」は通言語的には、内的構造の上でも、統語的性質の上でも幅広い多様性を見せ、それゆえ、文法体系の中において「語」というドメインが担う機能的役割も言語によって大きく異なる。

そこで、本プロジェクトでは、形式的単位としての「語」について通言語的に適用しうる定義を確認し、そのうえで、「語」が通言語的に見せる構造的多様性（内的構造の組み立て方・複雑さについての多様性）および機能的多様性（統語法との間の役割分担のあり方の多様性）の幅を探る。さらに、そこでの議論を基盤に、文法システムにおける形態法の位置づけ、形態法と統語法との関係という一般言語理論上の問題を考えていく。

[主　　査]	中山　俊秀		
[所　　員]	澤田　英夫	呉人　徳司	塩原　朝子
[所　　員]	荒川慎太郎	星　　泉	
[共同研究員]	風間伸次郎	角谷　征昭	児島　康宏
[共同研究員]	長崎　　郁	渡辺　　己	

中国・新疆ウイグル自治区阿克陶県ウジュマ郷のコンサク・マザール（イスラーム聖者廟）
撮影者：菅原純

クワギュトル族の伝統的デザイン
（カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、クワドラ島にて）撮影者：中山俊秀

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

形態・統語分析における ambiguity（曖昧性）—通言語的アプローチ

言語の形態・統語分析においては、ambiguous な現象、すなわち、同じ構文や形態についていくつかの異なる分析が可能である現象がみられることが珍しくない。こういった現象の詳細な検討は、特定の言語の記述に必要であるだけでなく、形態・統語理論における基本定義や、言語分析の方法一般、ひいては形態・統語構造の比較（歴史）研究においても、重要な意味を持つ。

本共同研究プロジェクトでは、アジア、太平洋地域の言語、アフリカの言語、またアメリカ・インディアンの言語、さらにはヨーロッパの言語を研究対象としている多くの専門家をメンバーとし、さまざまな言語における ambiguous な具体例を持ち寄り、詳細を検討することを目的とする。全体として最終的にひとつの結論に到達することを目指すのではなく、異なる分析方法や視点をぶつけあうことで、参加者がそれぞれの研究内容を向上させられるような研究会を目指す。

言語の記述にあたっては、対象言語にみられる文法現象が例外なく記述された文法規則にあてはまるのが理想的な状況であるといえよう。ところが現実には、定義のはざまにおちこむさまざまな現象がみられる。たとえば、形態・統語論面において二通り（またはそれ以上）の分析が可能であることは珍しくない（例：モンゴル語の特定の構文の使役分析と受動分析、フィリピン諸語の統語構造のフォーカス分析と能格分析）。一方、通言語的にみると、同じ用語で記述されたものでも実質が異な（ってみえ）るものもある（例：タイ語における「語」とアメリカ原住民語における「語」）。

それぞれの現象は文法記述（文法理論）における定義の多様性に起因するものなのだろうか、もしくは文法現象の歴史的変化を反映しているのか、それともそこにはこれらと性質の異なる言語に関する事実が隠れているのだろうか？

本プロジェクトでは、文法記述において先行研究における定説とは異なる分析がより適切であったり、データが定義にすっきりと当てはまらない具体的な例をとりあげ、具体的なデータを見ながらその示唆する内容について考察する。このために、類型論的にも地理的にも多様な言語を専門とする研究者をメンバーとする。

[主　　査]	呉人　徳司			
[所　　員]	塩原　朝子	荒川慎太郎	澤田　英夫	
	中山　俊秀	ペーリ・バースカララーオ		
	星　　泉			
[共同研究員]	梅谷　博之	大角　翠	奥田　統己	
	風間伸次郎	マーク・カンパナ		
	菊澤　律子	北野　浩章	桐生　和幸	
	栗林　　裕	小森　淳子	佐々木　冠	
	沈　　力	鄭　聖汝	角田　太作	
	當野　能之	中村　　渉	野瀬　昌彦	
	林　　徹	プラシャント・パルデシ		
	匹田　　剛	箕浦　信勝	山田　久就	
	米田　信子	ロバート・ラトクリフ		
	渡辺　　己			

スーダン東部、ハムシュコーレーブ地域に、1950年頃にモスクとクルアーン学校（ハルワ）を創設した宗教者、アリー・ベターイの廟。撮影者：大塚和夫

表象に関する総合的研究

このプロジェクトは、まえのプロジェクト「旅と表象の比較研究」を継承しつつ、「人間にとって表象とは何か」という問いに対し、問題提起を行うことを目的とする。主に以下の三点について研究を行う。

（1）「表象としてのＸ」・・Ｘには、他者、土地、場所、宗教（神、死者等）、自然（風景、動植物等）、政治、などが考えられ、それらに関する具体的な研究。
（2）表象に関する理論的、精神史的研究。
（3）表象媒体に関する認知科学的研究。

[主　　査]	高知尾　仁			
[所　　員]	深澤　秀夫	真島　一郎	小田　淳一	
[共同研究員]	浅井　雅志	荒木　正純	今村　真介	
	彌永　信美	齊藤　　晃	田中　純男	
	原　　毅彦			

「植民地責任」論からみる 脱植民地化の比較歴史学的研究

本プロジェクトは、ヨーロッパ諸国とアフリカを中心とする旧植民地との歴史的関係において、植民地支配および奴隷貿易のもたらした損害に対する補償や謝罪の問題が双方の当事者の間でどのように論じられ扱われてきたかを検討することをつうじ、脱植民地化過程の段階・特質を明らかにすることを目的としている。そのさい、日本＝アジア関係などを念頭においた比較史的観点を重視しながら、戦争責任論の中から生まれた「人道に対する罪」概念を援用し、「植民地責任」概念を提起しようとしている。アフリカにおける植民地支配はその前史としての奴隷貿易の歴史と不可分であるため、「植民地責任」概念は、必然的に、奴隷貿易の歴史にもかかわって敷衍されることになる。最終的には、この概念を用いて近代世界史の構造の中での脱植民地化過程とそれをめぐる歴史認識をアジア・アフリカの側から照射することを目指している。

南アフリカ共和国ケープタウン沖、ロベン島（ネルソン＝マンデラらの収容されていた監獄島）のモスク　撮影者：永原陽子

本プロジェクトは、研究所のすすめる三つの研究内容のうち、「地域生成に関する研究」にかかわるものであるが、「地域」を一つの限定された領域としてではなく、関係性の概念としてとらえようとしている。近年の旧植民地地域からの「補償要求」などの運動は、当該地域の人々の植民地支配の歴史についての認識を示すものであり、それは旧植民地領有国における歴史認識との相互関係の中で形成されている。

本プロジェクトは、アフリカ旧植民地を中心に据えつつ、日本＝アジア関係を重要な参照枠とすること、また奴隷貿易をも射程に入れた長期の歴史的視点をもつことで、従来の地域研究で、ともすれば後景に退きがちだった世界史の構造の問題に意識的にかかわり、また現代世界の中で具体的な解決を求められているテーマについて、歴史学的な立場から認識を深めようとするものである。

南アフリカ共和国ケープタウン近郊の高校、教室風景　撮影者：永原陽子

そのような意図から、本プロジェクトではアフリカ史研究者、ヨーロッパ帝国史研究者、ラテン・アメリカ史研究者、日本・アジア史研究者を糾合した「地域研究」の新しいスタイルを試みている。また、若手研究者、とくにPD層から大学院生を含む研究者を目指す人々を中心に組織し、プロジェクトをつうじて若手研究者を育成しつつ新しい共同研究の成果を挙げることを目指している。

本プロジェクトは科研費プロジェクトを兼ねており、年４回の研究会のほか、共同研究員の現地調査も並行して進めている。最新の現地調査の結果を持ち寄って研究内容を豊かにすることは、本プロジェクトの重要な内容である。最終的には、成果を商業出版で公表することを目指している。

[主　　査]	永原　陽子			
[共同研究員]	浅田　進史	網中　昭世	飯島みどり	
	大峰　真理	小山田紀子	尾立　要子	
	柴田　暖子	清水　正義	鈴木　茂	
	高林　敏之	旦　祐介	中野　聡	
	浜　忠雄	平野千果子		
	舩田クラーセンさやか		前川　一郎	
	真城　百華	溝辺　泰雄	吉澤　文寿	
	吉田　信	渡辺　和仁	渡辺　司	

ナミビア・ウィンドフークの旧黒人居住区の子供　撮影者：永原陽子

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

東アジアの社会変容と国際環境

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地域における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

[主　　査]	中見　立夫		
[所　　員]	クリスチャン・ダニエルス		栗原　浩英
[共同研究員]	赤嶺　　守	石井　　明	石川　禎浩
	井上　　治	井村　哲郎	江夏　由樹
	岡　　洋樹	岡本　隆司	笠原十九司
	加藤　直人	川島　　真	貴志　俊彦
	岸本　美緒	楠木　賢道	佐々木　揚
	新免　　康	菅原　　純	寺山　恭輔
	西村　成雄	萩原　　守	浜下　武志
	原　　暉之	平野　　聡	ブレンサイン
	細谷　良夫	松川　　節	松重　充浩
	毛里　和子	森川　哲雄	柳澤　　明
	吉澤誠一郎	吉田　豊子	

タイ文化圏における山地民の歴史的研究 ー総合的概念を確立するための手法開発

中国西南部から大陸東南アジア北部に跨がるタイ文化圏の歴史においては、タイ系民族の盆地政権がその周辺の山岳地帯に居住する山地民を緩やかに「統治」した。19世紀以降、タイ文化圏は中国、ミャンマー(ビルマ)、タイ、ラオス、ヴェトナム及びインドの６ヵ国に組み込まれて、盆地政権は消滅した。盆地政権の領民はこの六つの近代領域国家に同化を強要されはしたものの、タイ文化圏はなお存続している。これまで研究者は、盆地政権中心にこの地域全体の歴史を再構築してきたが、山地民が盆地政権の存続を揺るがす存在であるにもかかわらず、山地民の歴史的役割を重要視してこなかった。本プロジェクトの目的は山地民の歴史的役割を明らかにして、その役割を総合的に概念化することによってタイ文化圏の歴史的形成を再解釈することである。

センジュムのわんぱく坊主　ミャンマー(ビルマ)シャン州、チェントォン、センジュム村にて。撮影者：唐立

このような再解釈によって、これまでタイ系民族側から叙述されたタイ文化圏の歴史がもっと公平に見られるようになると期待できる。これまで山地民が果たした歴史的役割を重視しなかった理由としては、以下の２点が挙げられる。第一に歴史家は、この6ヵ国における近代国家の建国に貢献した文化や民族が果たした役割を強調する視点から歴史を再構築してきたが、山地民は貢献度が少ないため等閑視されてきた。第二に、研究者は各民族集団の固有な文化と歴史の解明を目的に、個別的に研究してきたため、山地民が共通に経験してきた歴史という視点が見落とされてしまった。夥しい数の民族集団が居住する地方はそれぞれ異なるが、その歴史体験の共通性を明らかにする視点を採用する手法によって、タイ文化圏の歴史に対する統一的な理解を深化させることを、本プロジェクトは目指している。

山地民の歴史研究には史料的な制約があり、先行研究も乏しいため、プロジェクトの運営上以下のような措置をとる。山地民の多くは自己の文字を有しないので、盆地のタイ系民族や、中国とビルマ王朝の史料、及び西洋人など、外部の人間の手による資料に依存せざるを得ない。そのため歴史学者以外にも言語学や文化人類学などの専門家の参加によって学際的なアプローチを採用する。さらに、1年目ではコアメンバーの共同研究員で、山地民の歴史を構想する枠組みを作り上げ、2年目以降その枠組みに沿う形で共同研究員を増やして研究を進行させる。なお、本プロジェクトは、昨年度から開始された科研費基盤研究B「言語・文化調査に基づくパラウン史の解明」と連携し、現地調査を踏まえた事例研究の分析も行なう。

[主　　査]	クリスチャン・ダニエルス			
[所　　員]	中見　立夫	新谷　忠彦	陶安あんど	
[共同研究員]	飯島　明子	樫永真佐夫	片岡　　樹	
	加藤　高志	小柳　美樹	山田　敦士	

センジュムのわんぱく坊主　ミャンマー(ビルマ)シャン州、チェントォン、センジュム村にて。撮影者：唐立

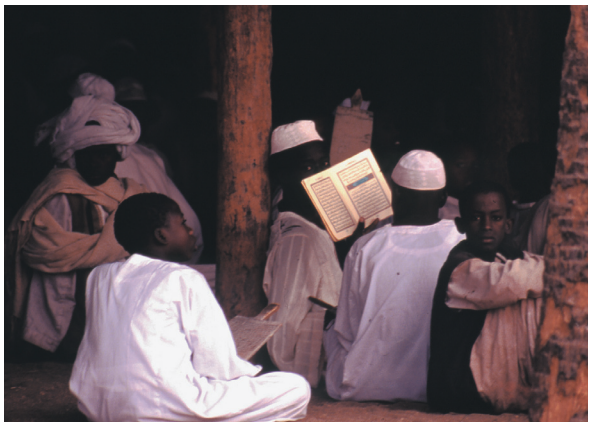
イスラーム写本・文書資料の総合的研究

イスラーム世界で著され、記された歴史的文化的遺産である写本・文書資料の総合的研究を目的としている。アラビア語、ペルシア語、オスマン・チャガタイ両トルコ語の写本・文書が主な対象となる。

写本、文書の利用は今日の学界ではあたりまえのこととなっているが、写本・文書資料利用のための方法論については十分な議論が尽くされないまま、進んでいるのが現状である。そこで、現在、日本の各地で行われている写本研究・文書研究をネットワーク化し、写本学、古文書学を踏まえた研究会を積み重ね、相互の知見を交換する。

また、少人数からなる作業グループを編成し、写本・文書資料の校訂、翻訳を推進する

[主　　査]	羽田　亨一			
[所　　員]	近藤　信彰	飯塚　正人	中見　立夫	
	マンスール・セファトゴル			
[共同研究員]	赤坂　恒明	秋葉　　純	磯貝　健一	
	江川ひかり	大河原知樹	大稔　哲也	
	小野　　浩	川本　正知	久保　一之	
	後藤　敦子	清水　和裕	高松　洋一	
	中町　信孝	林　佳世子	前田　弘毅	
	真下　裕之	間野　英二	守川　知子	
	森本　一夫	家島　彦一	矢島　洋一	
	山口　昭彦	渡部　良子		



スーダン東部、ハムシュコーレーブ地域にあるクルアーン学校(ハルワ)で学ぶ学生たち。同校にはスーダン各地から多数の学生が集まってきている。撮影者：大塚和夫

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究

現代世界は、一方では物心両面における比較的豊かな生活を保証すると同時に、他方では紛争・貧困・地球環境・疫病などきわめて大規模かつ深刻な問題を惹起している。これらの問題は互いに連関しているから、個別的対症療法は効果が限定的であり、新たな問題を引き起こしかねない。したがって、先ず地球文明がいかにあるべきかという明確な未来像が必要である。そしてそのためには、相互影響し合いつつ刻々に変化する複雑なこの世界を、自然・世界(共同体)・人間の３層において正確に理解しなければならないであろう。往時には一人の哲学者が担ったこの現状俯瞰と新しい世界構想の営為は、科学の加速度的進展と諸地域の急激な変化を伴う今日の世界においては、一人の研究者が遂行することが殆ど不可能となっている。それは人文・社会・自然の研究者の共同研究として、はじめて可能であろう。このような人文科学の新領域を「総合人間学」と呼びたい。

本研究は、以上の認識のもとに、「総合人間学」―自然と社会(地域)に関する最先端の知を集約し、それら諸現象の人間的価値を諸文明の精神伝統に照合して再検討しつつ、新しい世界観・人間観・倫理観の確立を目指す「共同研究の場」―の創出を模索するものである。

平成18年度研究計画

(１)第３回総合人間学国際シンポジウム　平成18年12月。招聘外国人講演者３名・日本人講演者２名

(２)研究会:２回(平成18年初夏　平成18年12月・シンポジウム期間中)

(３)総合人間学を確立するため、継続してフランスのMaison des Sciences del'Homme (Paris)、アメリカのHarvard Round Table (Harvard大学)との共同研究を実施する。

[主　　査]	中谷　英明		
[所　　員]	峰岸　真琴	宮崎　恒二	芝野　耕司
	羽田　亨一	町田　和彦	高島　　淳
	飯塚　正人	床呂　郁哉	荒川慎太郎
	伊藤智ゆき		
[共同研究員]	池内　　了	池田　知久	池本　幸生
	石堂　常世	市川　　裕	逸身喜一郎
	内堀　基光	内山　勝利	大津　　透
	丘山　　新	小川　正廣	柿木　隆介
	笠井　清登	桂　　紹隆	加藤　進昌
	河井　徳治	行場　次朗	黒田　　彰
	新宮　一成	杉下　守弘	杉本　良男
[共同研究員]	関根　清三	立木　康介	恒川　恵市
	手島　勲矢	中島　隆博	中島　秀人
	長野　泰彦	西川　昌弘	納富　信留
	信原　幸弘	林　　信夫	林　もも子
	原　洋之介	日高　敏隆	廣瀬　通孝
	広田　光一	寶珠山　稔	松尾　剛次
	丸山　　徹	三木　雅博	村上　征勝
	守屋　彰夫	矢野　　環	池本　幸生
	後藤　敏文	塩月　亮子	小島　　穀

朝鮮語史研究

朝鮮語は朝鮮半島で話されている言語であり、日本語同様、その起源や系統関係が不明な言語である。また朝鮮語は15世紀半ばにハングルが創製されるまで固有の文字をもっていなかったため、朝鮮語史の研究はより困難なものになっている。

それに加え、従来の朝鮮語の研究はそれぞれの研究者が特定の時代の朝鮮語について研究することが主で、朝鮮語史を研究する者同士が相互に協力することによって朝鮮語史全体の流れを追求するということはなかった。

そこで本プロジェクトでは、古代～近代に至る朝鮮語の研究者が集まり、各時代の朝鮮語について、音韻・文法・書誌学等さまざまな側面からの分析を試みる。

2006年度は、年２回の研究会を企画する(１回に１～２名程度の研究発表を予定)。また(現在科研費申請中の)朝鮮語語基データベース・中期～近代語篇(KRMORPH)と連携し、該当webサイトに本プロジェクトのコンテンツも盛り込む計画であり、それにより研究成果の公開及び朝鮮語史研究の中核形成を目指す。

[主　　査]	伊藤智ゆき		
[所　　員]	荒川慎太郎		
[共同研究員]	伊藤　英人	門脇　誠一	岸田　文隆
	趙　　義成	陳　　南澤	辻　　星児
	南　　潤珍	福井　　玲	藤本　幸夫

宣教に伴う言語学

「宣教に伴う言語学」とは、所謂「大航海時代」のキリスト教布教に伴う言語研究活動を指し、英語では既にMissionary Linguisticsの語で定着している。

主たる資料となる文献は、16〜17世紀のスペイン・ポルトガルによる宣教活動に伴って生産された文法書、語彙集、辞書・字書、教義書、修徳書、その他の布教関連書籍、及び関連歴史文書(規約、年報、報告、書簡など)である。

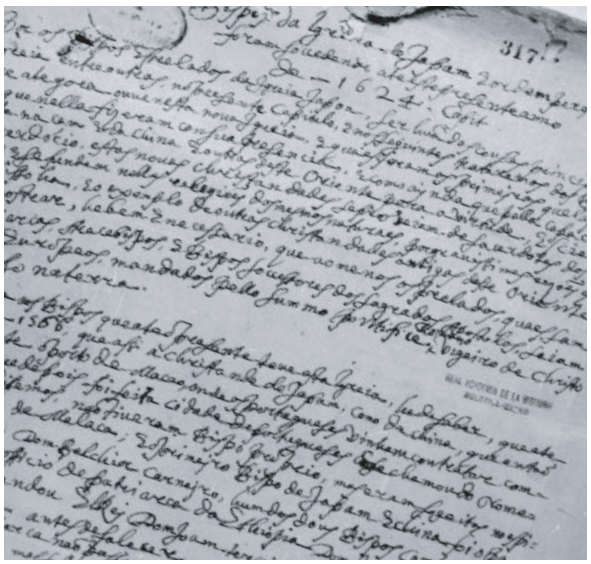
プロジェクト研究の目的は、次の通り。

(1)従来の日本の「キリシタン文献研究」の成果を以て、国際的な「宣教に伴う言語学」の共同研究活動の水準の向上に寄与する。

(2)対訳辞書類に重点を置き、15−17世紀のスペイン・ポルトガルに於ける辞書編纂史、同時代の日本に於ける辞書・字書編纂史を基礎とし、日本語以外の他の言語(例:コンカニ語)の対訳辞書も素材として、辞書編纂史・語彙研究史の論点を整理する。

(3)宣教活動に伴って生産された各国語の文法書類の文法カテゴリーの仕分け・対照等の対照研究、関連歴史文書類の書誌学的研究など、従来の日本の「キリシタン文献研究」の延長上にありながらも殆ど手つかずの状態にある領域に踏み出す。

[主　　査]	豊島	正之			
[共同研究員]	岸本	恵美	白井	純	丸山　徹



中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究

本研究では、海外中国人(本研究では、地政学的な「中国」の外に移住した中国系の人々を指す用語として用いる)を対象に、海外中国人を同質的、単一的に表象する従来の人文・社会科学の諸研究に共通した分析視点を批判的に再検討し、新たな海外中国人像(華人／チャイニーズ・クレオール等)や「民族」概念を再構築することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

(1)従来の諸研究において等閑視されてきた、周縁的存在となり土着化が進んだ中国系住民および多民族文化との混淆としてのチャイニーズ・クレオール等を中心とする多様な海外中国人に注目し、それらの人々が構成する様々な社会文化の実態、そしてそれらの人々のアイデンティティ形成過程を分析する。

(2)ホスト社会と中国系住民との相互作用、国民国家化の過程、ローカル／グローバルの関係性から生じる、中国系住民が関わる民族カテゴリーとそのエスニック・ポリティックスの実態を把握する。歴史過程の中で中国系住民の土着化、クレオール化、或いは「中国人化(華人化)」という異なるベクトルが、必ずしも時系列的にではなく、時に同時並行的に進んで来たことや、土着化やクレオール化の道を歩んだ海外中国人のある一部分が、特定の政治的、経済的な要因によって中国人の範疇から捨象されたことを明らかにする。

(3)土着化あるいはクレオール化した海外中国人という周縁性の排除によって、本質主義的な「華僑」「華人」像が想像されるプロセスを明らかにする。なお、本プロジェクトは、平成16年度より開始された科研費基盤A「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究」と連携し、現地調査を踏まえた研究を行っている。今年度は、科研費プロジェクトと合同で海外の研究者を招聘して、研究会を開催する予定である。

[主　　査]	三尾	裕子			
[所　　員]	西井	凉子			
[共同研究員]	赤嶺	淳	板垣	明美	市川　哲
	甲斐	勝二	紀	宝坤	桑山　敬己
	貞好	康志	末成	道男	菅谷　成子
	芹澤	知広	田村	和彦	田村　克己
	中西	裕二	信田	敏宏	舛谷　鋭
	宮下	克也	宮原	曉	山本須美子
	王	維			

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

ドイモイの歴史的考察

ドイモイ(刷新)政策がベトナム共産党の公式な政策として提起されてから、すでに18年が経過しようとしている。この間に、ドイモイはベトナムの党・国家の諸政策(政治・経済・軍事・外交・文化等)、社会、国民の価値観のあり方に大きな変化をもたらした。同時にその問題点も顕在化しつつあり、今やドイモイを総括すべき時期に入っているといってよい。

しかし、この間にドイモイを対象とした研究はどれほど進展したといえるだろうか。国内外のドイモイ研究に目を向けると、分野ごと(政治、経済、外交、軍事、法律など)のアプローチや各種調査の類が多く、ドイモイの全体像が見えないものが多い。とりわけ、ドイモイ研究の展開に際して不可避であると思われる次の２点に関して、議論が深化されないままの状態を続けておくことは許されないであろう。それは、第一に、ドイモイの起源に関わるテーマであり、その中には、(1)ドイモイの開始に際しての南ベトナムの役割、(2)レ・ズアン時代末期（1979年ー85年）の一連の改革政策(通貨改革、農業における生産物請負制など)とドイモイの関連性をどのように評価するかという問題が含まれる。第二には、一党独裁下における市場経済導入、経済発展優先志向などの点で、ドイモイと共通すると思われる改革政策が他国にも存在する(した)事実に着目して、ドイモイを一国の枠組から脱却して考察する必要性があるのではないかということである。具体的な事例としては、(1)ドイモイの始動段階におけるソ連のペレストロイカとの関連性、(2)中国の改革・開放政策とドイモイの関連、(3)開発独裁体制との類似性などがあげられる。

本プロジェクトは、以上のような問題認識に立って、大きく二つのアプローチに依拠しながら、ドイモイ研究の新境地開拓をめざそうとするものである。第一には、ドイモイにおけるベトナム固有の要因を探究するために歴史的なアプローチを援用していく。具体的なテーマとしては、(1)ドイモイの起源に関わる諸問題(南ベトナムの存在とドイモイ、レ・ズアン時代末期の改革政策の位置付け、北部におけるドイモイに先行する諸現象、ソ連におけるペレストロイカの影響)(2)ドイモイ以前の旧体制＝集団主義体制の構造を明らかにするとともに記録する、(3)ドイモイにおける根幹部分と付随的な部分は何か、(4)ドイモイにおける社会主義的性格はどこに残存しているのか、があげられる。第二には、体制比較を通じて、ドイモイのもつ普遍的な側面を解明することである。比較の対象としては、中国の改革・開放政策、ラオスの新思考政策、移行経済諸国(旧ソ連、東欧など)、インドネシアの開発独裁体制が想定されるが、比較するための基礎を厳密に定義するとともに、体制間の接触、相互作用にも注意していく。

[主　　査]	栗原　浩英		
[所　　員]	根本　　敬		
[共同研究員]	石井　　明	加藤　弘之	白石　昌也
	鈴木　基義	竹内　郁雄	古田　元夫
	今村　宣勝		

マレー世界における地方文化

国家としてのインドネシア、マレーシアを包含する広義の「マレー世界」の多様な地方文化に関する人類学的な研究はこれまでも行われてきた。しかし、多くの地方に残る現地語文書に関しては、人類学、歴史学いずれの分野からも着目されていない。これらの文書の中には、各地方の文化の形成や変遷に関する興味深い資料が含まれており、あらたな資料の宝庫である。本計画は、これらの文書を中心に、地方文化の形成過程に関する研究を行うものである。本計画はいくつかの関連事業を有する。2006年度においては、2005年度のインドネシア文献学に関する研修に続き、ジャワ文献学セミナーを実施し、専門研究者の育成、再訓練を行う。

[主　　査]	新井　和広		
[所　　員]	宮崎　恒二	塩原　朝子	床呂　郁哉
	ティティク・プジアストゥティ		
[共同研究員]	青山　　亨	奥島　美夏	川島　　緑
	久志本裕子	国谷　　徹	黒田　景子
	小林　寧子	塩谷　もも	篠崎　香織
	菅原　由美	坪井　祐司	東長　　靖
	冨田　　暁	中田　　考	西　　芳美
	西尾　寛治	オマール・ファルーク	
	服部　美奈	水上　　浩	山口　裕子
	山本　博之		

東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」

東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバリゼーションのプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動(Human Mobility)」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状況に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

なお、本研究プロジェクトは、科研費による「新たな東地中海地域像の構築」プロジェクトと連動して進められている。

[主　　査]	黒木　英充		
[所　　員]	飯塚　正人	小田　淳一	床呂　郁哉
[共同研究員]	臼杵　　陽	小副川　琢	粕谷　　元
	北澤　義之	栗田　禎子	佐藤　幸男
	土佐　弘之	長沢　栄治	中村　妙子
	間　　寧	堀井　　優	前田　弘毅
	佐原　徹哉	末近　浩太	澤江　史子
	松井　真子	村田奈々子	森　晋太郎
	吉村　貴之	屋山久美子	家島　彦一

ムスリムの生活世界とその変容 ―フィールドの視点から

本プロジェクトは、世界総人口の２割ほどを占めるとされる世界各地のムスリム(イスラームの信者)の生活世界の実態を民族誌的アプローチから探るとともに、比較を通してそれらに見られる共通性・普遍性と地域・時代ごとの特殊性の双方を明らかにすることを主な目的とする。対象とする地域は、これまでのイスラーム研究において中心とみなされてきた中東のみならず、サハラ以南アフリカ、南アジア、中央アジア、東南アジア、東アジアを含み、さらに欧米などのムスリム・マイノリティ社会も視野に入れる。

主要な研究テーマとしては、衣食住をはじめとする、ムスリムの日常生活に見られる些細な社会的・文化的現象の検討を出発点とし、それから国家や国際レベルにおける政治・経済的大状況を考察するというボトムアップ的視点、すなわちフィールドの現実を重視する社会・文化人類学や地域研究的な方法を重視する。それと同時に、イスラーム学の専門家にも参加してもらい、ローカルな場における民族誌的事実とより普遍的なイスラームの法学・神学的解釈との異同も検討する。また、今日のムスリム社会が、一方ではイスラーム復興のさまざまな兆候を見せているとともに、他方では近代化・世俗化・グローバル化などの影響を強く受けていることを考慮し、その現代的変容のあり方にも注目しつつ研究を進める。

なお、本プロジェクトは、AA研が主体となり2005年度から発足した拠点形成事業「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の一環でもある。

[主　　査]	大塚　和夫		
[所　　員]	宮崎　恒二	黒木　英充	飯塚　正人
	新井　和広	真島　一郎	床呂　郁哉
	近藤　信彰		
[共同研究員]	青柳かおる	赤堀　雅幸	石原美奈子
	臼杵　　陽	宇野　昌樹	大坪　玲子
	大稔　哲也	奥野　克己	菊地　滋夫
	小杉　　泰	小牧　幸代	坂井　信三
	澤井　充生	清水　芳見	鷹木　恵子
	多和田裕司	東長　　靖	外川　昌彦
	中田　　考	長津　一史	縄田　浩志
	子島　　進	信田　敏宏	花渕　馨也
	堀内　正樹	三尾　　稔	村上　　薫
	山岸　智子	吉田世津子	中山　紀子
	高山　峰夫		

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

人類社会の進化史的基盤研究(1)

本研究プロジェクトは、人類社会を霊長類から現生人類に至る進化の軸上で比較考察し、人類学における社会理論の新たな展開をめざそうとするものである。それによって人類の「文化」が社会形成にいかに関与しているかを再考する。

社会理論のなかで第一に問題となる「集団」に焦点を当てる。「集団」の概念を霊長類進化史上におくことにより、この概念の自明性を崩し、個体レヴェルの自他認識を越え「他集団」なる抽象的な他者の生成に到る「集団」の成りたちをふくめ、「集団」の認識(perception)の生成と展開を進化史的な視点から検討する。これにより、他者認知やアイデンティティといった個体間関係、およびテリトリーの生成とその認知、規則の発生と定着の過程といった個体間関係を超えた社会事象に至る問題群に迫る。

社会事象にあって、「集団」は比較的顕在化(目に見えやすい)したものである。したがって「人類社会の進化史的基盤研究」というときに、広く霊長類学的知見を含めて、人類史的規模での比較の橋頭堡が築きやすい。長期的なプロジェクト研究としては、継続的に「所有」、「制度」などを扱ってゆく予定であるが、その第一歩として、今回のプロジェクトを位置づけている。

共同研究員として、霊長類学の分野からは霊長類社会学および霊長類生態学の専門家、人類学の分野からは生態人類学、文化・社会人類学、人類生態学の専門家を加えている。これに社会思想史の専門家に参加してもらうことにより、霊長類から人類への架橋の理論的意義を考察する示唆を得たいと考えている。

また副次的な効果として、近年、社会生物学、行動生態学への理論的特化という傾向を強めつつある霊長類学研究を、人類との関係に再び位置づけることにより、日本における霊長類学および生態人類学の創成契機であった人間存在の根源的かつ多元的理解という学的動機を回復しうることが期待される。

[主　　査]	河合	香吏				
[所　　員]	床呂	郁哉	西井	涼子		
[共同研究員]	伊藤	詞子	今村	仁司	内堀	基光
	梅崎	昌裕	大村	敬一	北村	光二
	衣笠	聡史	黒田	末寿	杉山	祐子
	曽我	亨	田中	雅一	寺嶋	秀明
	中川	尚史	早木	仁成	船曳	建夫

マルセル・モース研究ー社会・交換・組合

本プロジェクトでは、フランス社会学・民族学の基礎をきずいたマルセル・モースの業績を、書評・時事論説・講演録・未定稿なども含めた、そのほぼ全作品について横断的に吟味しながら、個人と国家のはざまに位置するものとして構想された「社会société」とは何であり、また何でなかったのかを、今日の視点から再検討する作業がめざされている。

とりわけ、学問形成期のサンスクリット研究から20世紀転換期の供犠論、呪術論をへて、やがて『贈与論』(1925年)で表明されることになる「交換」の民族学的モティーフが、同じ両大戦間期(=第三インターナショナル／コミンテルン期)に発表された一連の協同組合論、ボリシェヴィズム論、暴力論、ナシオン論などと、また他方における個体論、身体論、人格論、技術論などと、「社会」学的次元でいかなる理論的連関により繋がれていたかが、共同研究の中心的論点となる。

『民族誌学の手引き』の著者は、法・道徳・貨幣・革命のかなたに、どのような凝集力をそなえた「社会」の姿を夢みていたのか。それはまた、今日のアジア・アフリカ諸国における「社会」の動態と、なんらかの接点をもちうる夢だったのか。

[主　　査]	真島	一郎				
[所　　員]	深澤	秀夫	高島	淳		
[共同研究員]	泉	克典	小杉麻李亜		関	一敏
	渡辺	公三				

共同研究プロジェクト

所外代表による共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究

世界の声調・ピッチアクセント言語を通言語的に考察し、その音声的基盤、体系、機能、歴史的変化（発生、消滅を含む）などを総合的に考察する。

具体的研究テーマとしては、例えば、以下のようなものがある。1）ピッチの音声的特性、2）文節素との関係、3）個々の言語における声調・アクセントの体系、4）声調の語彙的、文法的機能、5）声調言語とアクセント言語の違いおよびタイポロジー、6）通時的変化と比較研究、7）声調の発声と消滅。

世界には声調・ピッチアクセント言語は多く話されている。日本語、朝鮮語、中国語などの東アジア諸語、タイ語・ベトナム語などの東南アジア諸語、チベット系諸語、ナイル系・バンツー系などアフリカ諸語、新トランス・ニューギニア系などニューギニア諸語、アサバスカ系などアメリカ諸語などである。一見バラバラに見える個々の言語におけるそれぞれの現象も、いくつかの言語学的原理に根ざして生じていることが明らかになる。本研究はこれらの現象を様々な角度から取り上げ、人間語言語にとって声調・アクセントとはなにかを総合的考察することを目標とする。

[主　　査]	梶　茂樹〔京都大学〕		
[所　　員]	荒川慎太郎	新谷　忠彦	稗田　乃
	町田　和彦	峰岸　真琴	呉人　徳司
	澤田　英夫	豊島　正之	中山　俊秀
	星　　泉	伊藤智ゆき	塩原　朝子
[共同研究員]	阿部　優子	李　　連珠	池田　巧
	生駒　美喜	市田　泰弘	岩田　礼
	上田　広美	上野　善道	
	ドナ・エリクソン		遠藤　光暁
	大江　孝男	岡崎　正男	加賀谷良平
	加藤　昌彦	角谷　征昭	上岡　弘二
	神谷　俊郎	木部　暢子	久保　智之
	窪薗　晴夫	坂本　恭章	塩田　勝彦
	品川　大輔	清水　克正	清水　政明
	杉藤美代子	鈴木　玲子	田中　伸一
	壇辻　正剛	中井幸比古	中嶋　幹起
	中西　裕樹	中野　暁雄	長尾　美武
	長野　泰彦	新田　哲夫	早田　輝洋
	原口　庄輔	平山　久雄	福井　玲
	堀　　博文	松森　晶子	箕浦　信勝
[共同研究員]	藪　　司郎	結城　佐織	湯川　恭敏
	米田　信子		

インドネシアの国語政策と言語状況の変化

スハルト体制の終焉とともに、イデオロギーとしてのインドネシア語国語政策の下にこれまで封じ込められていた民族言語（地方語）が解き放たれ、公共の場においてより自由な言説が生まれてきている。加えて、英語や中国語が都市部を中心にして日常生活の中にこれまで以上に入り込んできている。これらの現象は、これまでのインドネシア語が担ってきた役割に変化が生じ、インドネシアの言語の様態に変化が生じていることを示唆しているように思われる。本プロジェクトでは、まず1945年の独立以降、インドネシア語が各地域社会においてどのように認識され、どのように「発展」してきたのか、インドネシア語とは何だったのかを再考することから始める。インドネシアの人々にとって国語とは何なのか、インドネシア語が国語と定められ、いかにして国語となっていった（ならなかった）のか、地域社会の言語（地方語）との関係性はどのようなものなのか。これらの問題を、言語学、言語政策、文化人類学、社会学、メディア論、政治学、歴史学、文学、アイデンティティー、グローバル化などの観点から議論していく。

また、強権的な政治体制が崩れた頃から多様なメディアを通してグローバル化の影響がインドネシア社会に浸透して（外からの動き）きているが、一方で中央に対する地方の自治権も拡大（内からの動き）してきた。外からと内からの新しい動きが、どのようにインドネシアの言語状況に変化をもたらしたのか、今後もたらしていくと考えられるのかについても議論していきたい。

[主　　査]	森山　幹弘〔南山大学〕		
[所　　員]	塩原　朝子	宮崎　恒二	
[共同研究員]	ウガ・ペルチェカ		鏡味　治也
	柏村　彰夫	白石　さや	津田　浩司
	舟田　京子		

研究者招へい

本研究所は、国際的な共同研究を実施するために、海外からアジア・アフリカの研究者を外国人研究者として招聘しています。これらの研究者は、研究の内容に応じて研究ユニットないしセンターに配置されます。

また、そのほか国内の研究者や日本学術振興会や国際交流基金の招聘計画などで来日する海外の研究者をフェローとして積極的に受け入れ、学術交流を推進しています。

外国人研究員

2004年	Razafiarivony, Michel	マダガスカル	民族学
	Motingea, Andre Mangulu	コンゴ	言語学
	Mkude, Daniel Joseph	タンザニア	言語学
	Benhadda, Abderrahim	モロッコ	歴史学
	Witzel, Michael	ドイツ	言語学
2005年	Sefatgol, Mansur	イラン	サファヴィー朝史
	Kedit, Peter Mulok	マレーシア	社会/文化人類学
	Brenzinger, Matthias	ドイツ	アフリカ言語学、アフリカ史
	Pudjiastuti, Titik	インドネシア	インドネシア文献学、歴史学
	Subbarao, Karumuri Venkata	インド	言語学
2006年（予定）	Milner Anthony	オーストラリア	東南アジア史学
	Beisembiev, Timur Kasymovich	カザフスタン	歴史学
	Aymard, Maurice	フランス	経済史学
	董　珊	中国	中国古文字学・考古学
	Janhunen, Juha	フィンランド	言語学、民族史
	Lestel, Dominique Pierre	フランス	動物行動学、哲学・認知心理学

フェロー（旧外国人フェロー制度）

2004年	Christopher I. Beckwith	アメリカ合衆国	言語学・中央ユーラシア・東アジア研究
	Sangi Vladimir Mikhajlovich	ロシア連邦	言語学・口承文学
	Roberts-Kohno Rosalind Ruth	アメリカ合衆国	言語学
	Massoud Daher	レバノン	歴史学
	La Minh Hang	ベトナム	言語学
	王菊	中国	教育管理学
2005年	Roberts-Kohno Rosalind Ruth	アメリカ合衆国	言語学
	Naw Si Blut	ミャンマー	政治史研究
	宮治美江子	東京国際大学	人類学
2006年（予定）	清水昭俊	元・一橋大学教授	政治史研究
	Naw Si Blut	ミャンマー	人類学
	石井溥	元・ＡＡ研教授	民族学、人類学
	内堀基光	放送大学	人類学
	Massoud Daher	レバノン	歴史学

シンポジウム

共同利用研究所としてのアジア・アフリカ言語文化研究所は、文部科学省「中核的研究機関支援プログラム」(平成７年度から13年度まで) により「卓越した研究拠点」(COE: Center of Excellence) に指定されて以降、学術研究の情報化、国際化にこれまで以上重点をおいた事業を展開しています。国際化の面では、国内外の先端的な研究を行っている研究者を招聘し、国際シンポジウムを開催しています。本研究所が日本における人文社会科学の分野で先導的な研究を推進していく上で、国際的な学術交流は、今後ますます重要な活動となっていくことは間違いありません。

これまでに開催された主なシンポジウムは以下のとおりです。

過去に行われたシンポジウム（カッコ内は開催期間）

■東南アジアにおける人の移動と文化の創造
（1996.12/3〜5）

■音調の通言語的研究―声調の発生、類型および関連研究
（1998.12/10〜12）

■南アジアにおける言語接触と収束的発達
（1999.12/6〜9）

■音調の通言語的研究―音調の発生、日本語アクセント論および関連研究
（2000.12/12〜14）

■非主格の「主語」をめぐって
（2001.12/18〜21）

■音調の通言語的研究―歴史的発展、音声学的基盤および記述研究
（2002.12/17〜19）

■人間の安全保障〜いま「現地」に立ちもどって考える
（2003.11/10）

■境域社会のダイナミクス―東南アジアにおける国境地域の比較
（2003.12/10〜12）

■インド系文字―過去そして未来
（2003.12/17〜19）

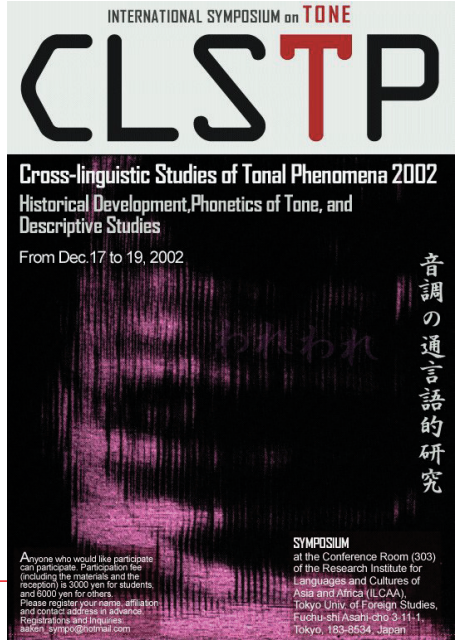
■アサバスカの再活性化における相互交流
（2004.2/16〜18）

■ネパールの社会政治動態
（2004.2/28〜29）

■在臺灣發現日本〜台湾における日本認識
（2004.3/27）

■北部南アジアの社会動態
（2004.6/25〜27）

■Thinking Malayness
（2004.7/19〜21）



シンポジウム

過去に行われたシンポジウム（カッコ内は開催期間）

■日本占領期ビルマの歴史的検証（1942〜45）
（2004. 10/9〜10）

■レバノン内戦再考（1975〜1990）
（2004.11/3）

■現代アラブ世界における歴史研究
：マグリブとマシュリクから
（2004.11/4）

■音調に関する通言語的研究
ー歴史的発展、音声学的基盤および記述研究
（2004.12/14〜16）

■9. 11後の世界における政治的暴力と人間の安全保障
（2004.12/18〜19）

■在臺灣發現日本〜台湾における植民地支配と日本
（2005.3/5〜6）

■台湾原住民研究〜日本と台湾、過去と現在
（2005.3/26〜27）

■オスマン地中海世界における政治経済交流
（2005.4/23）

■変貌するアフリカ・変貌する諸学との対話
ー生態人類学、47年後の意味
（2005.5/23）

■分断から統合へ？ーキプロスを中心とした
東地中海地域変容の多角的分析
（2005.7/19）

■"モンゴル"の領域
（2005.7/20）

■The Diversity of Chinese Immigrant Identities:
From Sojourning to Indigenization and Trans-nationality
（2005.9/23〜24）

■アジア・アフリカドキュメンタリー映画会議2005
ー排除の表象にたじろがぬ表象を
（2005.9/23〜24）

■アジア人間科学への道ー東洋学とアジア研究
（2005.9/24）

■総合人間学国際シンポジウム
ー諸文明から未来世界を構想する
（2005.10/22〜23）

■ペルシア語文化圏研究の可能性
（2005.12/3〜4）

■AMBIGUITY IN LINGUISTIC ANALYSIS
（2005.12/17〜18）

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力・共同研究を進めています。またこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層充実を図ろうとしています。

これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下のとおりです。

■これまでの外国研究機関との共同研究

年	国	機　関	共同研究締結内容	協力する分野
1978年	カメルーン	カメルーン・国立科学技術研究機構	カメルーン連合共和国立科学技術研究機構と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の間の科学的協力に関する同意書	人文科学の総ての分野、特に社会学、言語学、歴史学、民族学
1987年	インド	インド・文部省インド諸語中央研究所	インド国文部省インド諸語中央研究所(略称CIIL)と日本国東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(略称ILCAA)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびインド諸語と日本語に関連したその他の専門分野
1987年	インド	インド・インド統計研究所	インド共和国インド統計研究所(略称ISI)と日本国東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(略称ILCAA)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびインド諸語と日本語に関連したその他の専門分野
1988年	フランス	フランス・チベット言語文化研究所	フランス共和国チベット言語文化研究所(略称LCAT)と日本国東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(略称ILCAA)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびチベット語と日本語に関連したその他の専門分野
1988年	マリ	マリ・人文科学研究所	マリ共和国人文科学研究所と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との間の学術協力に関する協約書	人文科学のすべての分野、及びこれに関連する分野
1996年	イラン	イラン・農業計画・経済研究センター	農業計画・経済研究センター(C.A.P.E.S)と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(ILCAA)の研究協力協定書	イラン文化・日本文化

外国研究機関との共同研究

年	国	機関	共同研究締結内容	協力する分野
1997年	ラオス	ラオス・文化研究所	アジア・アフリカ言語文化研究所(日本)と文化研究所(ラオス人民民主共和国)との間の学術協力に関する協定書	人文科学のすべての分野、及びこれに関連する分野
2000年	インドネシア	インドネシア科学院社会文化研究センター(PMB-LIPI)	アジア・アフリカ言語文化研究所(日本)とインドネシア科学院社会文化センターとの学術協力に関する覚え書	文化人類学
2004年	オーストリア	オーストリア・科学アカデミー	東京外国語大学外国アジア・アフリカ言語文化研究所(日本)とオーストリア科学アカデミーとの学術協力に関する覚え書	インド学、仏教学、文献情報学
2004年	コートディヴォワール共和国	アフリカ演劇コミュニケーション研究・育成・創成センター(CARAS)	学術協力に関する同意書	内戦・民族紛争など人間の安全保障をめぐる緊急の課題
2005年	レバノン共和国	ドイツ東洋学会ベイルート・ドイツ東洋学研究所(OIB)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(日本)とドイツ東洋学会ベイルート・ドイツ東洋学研究所(レバノン共和国)との学術協力に関する申し合わせ	現地研究拠点活動に係る専門分野
2005年	レバノン共和国	レバノン大学人文科学部第1部(FHS-I-LU)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(日本)とレバノン大学人文科学部第1部(レバノン共和国)との学術協力に関する申し合わせ	現地研究拠点活動に係る専門分野
2005年	フランス	パリ人間科学館(MSH)	学術協力協定書　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(ILCAA)、東京、日本および人間科学館(MSH)、パリ、フランス	総合人間学
2005年	インド	高等コンピューティング開発センター(CDAC)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(ILCAA)、東京、日本および高等コンピューティング開発センター(CDAC)、プネー、インド間の学術協定に関する申し合わせ覚書	言語解析、情報学

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

■目的

フィールドサイエンス研究企画センター(略称FSC)は、平成17年度から所内措置により活動を開始しておりましたが、平成18年度４月に正式に発足しました。AA研の研究活動を特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に開発して、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」という「現地学」を構築するとともに、調査関連データを体系的に蓄積し、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。

■活動の指針

FSCの当面の活動には、次の６本の柱から成ります。特に(１)～(４)については、これらを包括する研究事業「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の事業本部をFSCに置き、その推進主体の役割を果たします。この事業は、現在のアジア・アフリカを俯瞰した際に中東・イスラーム圏に焦点を当てた研究が極めて重要であるとの認識に立って、平成17～21年度文部科学省特別教育研究経費をもって実施するものです。

(1)研究手法の開発

海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを、FSCの研究に関わる業務活動とします。中東地域を中心にイスラーム圏での臨地調査の研究がいかにあるべきか、を当面の重点課題とします。

(2)大型共同研究プロジェクトの実施

「ムスリムと他者性」をテーマとして、大型研究プロジェクトを実施します。具体的には、中東・イスラーム圏を中心にグローバルな視野を持つ複数の共同研究プロジェクトを相互に関連させつつ、協同して推進します。

(3)研修事業

上記の成果の社会還元の一部として、研究手法に関わる研修「中東・イスラーム研究セミナー」(７月・12月)、「中東・イスラーム教育セミナー」(９月)、「ジャワ文献学セミナー」(5月～7月)を実施します。それぞれ博士論文執筆予定レベルの若手研究者、大学院生の研修生を公募し、地域や専攻分野の枠を超えた学際交流の場を提供します。

(4)現地研究拠点の設置

上記(１)～(３)の活動を効果的に遂行するため、複数の海外現地研究拠点を設置する準備を進めます。レバノンのベイルートをはじめ中東地域・イスラーム圏を重点的にカバーし、わが国におけるこの地域の研究の先端的拠点となることを目指します。(→p.27参照)

(5)海外学術調査総括班の実績の継承と展開

「海外学術調査総括班」は、1983年以来、本研究所に事務局をおきつつ、他機関に所属する研究者と協力して組織され、科学研究費補助金(海外学術調査)にかかわる研究者・研究組織間、および研究者側と日本学術振興会の間の情報交換、連絡調整などの活動を行ってきました。活動の主なものとしては、海外学術調査の研究組織の代表者を集めて情報交換を行う「海外学術調査総括班フォーラム」の開催、国際情勢に即応した研究を可能にするための現地調査、これまでの海外学術調査に関する蓄積データのウェッブページにおける限定公開とその利用の開発、および広報などです。今後、FSCが中心となり「総括班」の実績を継承し、さらに展開していきます。

URLは、http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/index-j.html

(6)地域研究コンソーシアムとの連携

「地域研究コンソーシアム」は、教育研究組織のみならずNGOも含めた幅広いアカデミック・コミュニティに立脚して、地域研究関連情報を蓄積し、その成果を広く社会に問うことなどを目的として、2004年４月26日に発足しました。全国共同利用研究所であるAA研は、こうした協議体のなかで幹事組織の一つとして大きな役割を果たしていきますが、FSCはその連携活動の窓口として機能します。

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

中東イスラーム研究教育プロジェクト

Project MEIS at TUFS

中東イスラーム世界の政治・社会・文化に関する研究を積極的に推進するために、学部・大学院のスタッフとも協力しながら、2005（平成17）年度から５カ年計画でスタートした事業です（文部科学省特別教育研究経費による）。イスラーム世界に設けられる現地研究拠点での共同研究の展開を軸に、高度な研究プロジェクトの組織運営から、さまざまなレベルにおける研修・教育活動までをカバーしています。

AA研のスタッフが主として取り組んでいる事業は、以下のものです。

（１）現地研究拠点の設立と運営―レバノンのベイルート拠点を2006（平成18）年２月に開設し、活動を開始しています（p.27を参照してください）。さらに、コートディヴォワールのアビジャン拠点とマレーシアのコタキナバル拠点も開設準備中です。

（２）中東・イスラームに関する共同研究プロジェクトの実施（p.8の共同研究プロジェクト一覧を参照してください）。

（３）全国の大学院生や博士課程満期修了者などを対象とした中東・イスラーム研究セミナーと中東・イスラーム教育セミナーの運営（次項を参照してください）。

その他、国内・国外の研究者を招いた研究会やシンポジウム、ジャワ語やペルシア語の文献学・文書学セミナーなども行っています。

このような活動を通して、日本における中東やイスラーム研究の全国的な発展や国際的展開に貢献するとともに、次世代を担う若手研究者のための研修事業も進めております。

また、学部・大学院のほうでは中東・イスラームに関する授業・講義の充実（AA研スタッフも協力しています）に努めるとともに、中東の主要メディアの記事の日本語翻訳をWebページで公開して、広く社会に最新の中東情報を提供しております。

なお、本プロジェクトのより詳しい説明は、下記のWebページをご覧ください。

http://www.tufs.ac.jp/common/prmeis/

■中東・イスラーム研究セミナー、中東・イスラーム教育セミナー

2005（平成17）年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している事業です。中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めようとしている若手研究者（大学院生以上）を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションのスキルを向上させることを目的とした研修事業です。人文・社会科学分野が中心になりますが、受講者の専門分野は特に限定しておりません。

中東・イスラーム教育セミナーは大学院生を対象に、AA研スタッフと招聘講師による講義、そして希望者による研究発表から構成されています。学部段階からこの研究領域に関心を持ち続けてきた院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームにそれほど深い知識を持たない院生も受け入れ、中東・イスラーム世界とさまざまな専門分野の基礎的な知識の提供、そして受講者の間の討論を通した意見・知識の交換の場を作っております。

中東・イスラーム研究セミナーは、それよりも一段高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期（博士課程）および博士論文の準備をしている方々を対象にしています。ここでは講義は行わず、共同研究プロジェクト方式を採用し、研究発表とそれに基づく質疑応答・討論の機会を提供します。それを通して博士論文執筆のヒントを得たり、異なる研究分野や地域の研究者との意見交換から知識の幅を拡充したりすることが期待されます。年に１回の教育セミナーとは異なり、少人数で行われる研究セミナーは、年に２回開催されます。

なお本事業は、2006（平成18）年度から、東京外国語大学大学院、および同大学院と単位互換協定を結んでいる大学院に所属している院生には、単位履修申請科目となっております。

本事業のより詳しい説明、ならびにこれまでの受講生のセミナーに対する感想・評価に関しては、下記のWebページをご覧ください。

http://www.aa.ufs.ac.jp/fsc/meis/kyouiku_s.html（教育セミナー）
http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/kenkyu_s.html（研究セミナー）

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

中東研究日本センター（Japan Center for Middle Eastern Studies 略称JaCMES）

中東研究日本センターは、AA研がレバノンの首都ベイルートに設置した初の海外研究拠点です。2005年12月15日にレバノン政府閣議決定による認可を受けて、2006年２月１日に開所式を行いました。

中東研究日本センターの活動は、フィールドサイエンス研究企画センターの事業の一角を構成すると同時に、文部科学省特別教育推進経費「中東イスラーム研究教育プロジェクト」事業の一部でもあります。

この研究拠点の設置目的は、(1)日本における中東研究の基盤を強化すること、(2)日本と中東、とりわけレバノンとの間の直接的学術交流を推進すること、(3)中東研究を志す日本の若手研究者を支援すること、を主なものとしています。

そして次のような活動を推進することにより、AA研の全国共同利用機能を海外において展開することをねらっています。

(1)国際シンポジウムの開催

レバノン人も含めた国際的共同研究を推進し、その一環として国際シンポジウムを開催します。「内戦後社会における記憶の役割」「イスラームと他者性」オスマン期シリア地域における異教徒間関係」といったテーマが想定されます。

(2)ベイルート研究報告会議

日本の博士課程大学院生やポスト・ドクトラルの若手研究者が最新の研究報告を行い、レバノンを初めとした中東現地の研究者らと交流する機会を提供します。

(3)若手研究者の調査派遣

日本の若手研究者を派遣して、一定期間、現地調査に従事する機会を提供します。

(4)中東研究者の招聘による研究会開催

レバノンを初めとして中東地域から研究者を日本に招聘して講演会やセミナーなど研究会を行い、直接的な学術交流を推進します。

(5)ベイルート学術情報の紹介

ベイルートを中心にレバノンの活発な学術・文化的活動の情報を収集し、ウェッブページで公開して紹介します。

なお、2006年度の中東研究日本センター長は、フィールドサイエンス研究企画センター長が兼務します。

所在地：Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura, Emir Bashir Street,
Central District, Beirut, LEBANON
TEL/FAX：+961-1-975851
URL：http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/jacmes/

JaCMESが入るアザリーエ・ビルディング。ベイルート初の近代大型ビル。1975年以降の内戦による損傷から見事に復興した。垂れ幕の人物は2005年2月に暗殺されたハリーリー元首相。撮影者：黒木英充

JaCMESの会議室（40–50人収容可）兼資料閲覧室。辞書類や近現代レバノン研究の基礎資料、パソコンや映像機器を備える。他に連絡事務室スペースがある。

研究未開発言語文化の調査事業

これまで研究の蓄積のないアジア・アフリカの言語文化に関する資料を収集し、それらの研究を促進するため、本研究所では、研究者をアジア・アフリカの諸国及びそれらの旧宗主国に計画的に派遣しています。これまで派遣された研究者ならびに派遣先は以下の通りです。

派遣年数	派遣された研究者	
1967-1969	石垣幸雄(エチオピア))	守野庸雄(タンザニア)
1969-1971	松下周二(ナイジェリア)	家島彦一(アラブ連合)
1971-1973	内藤雅雄(インド)	中野暁雄(モロッコ、南イエメン)
1973-1975	福井勝義(ソマリア)	中嶋幹起(香港)
1975-1977	加賀谷良平(ボツワナ)	湯川恭敏(タンザニア、ザイール)
1977-1979	石井　溥(ネパール)	藪　司郎(ビルマ)
1979-1981	羽田亨一(イラン、トルコ)	清水宏祐(アラブ連合、イラン、トルコ)
1981-1983	山本勇次(ネパール)	新谷忠彦(ニューカレドニア)
1983-1985	辻　伸久(中国、香港)	水島　司(インド)
1985-1987	中見立夫(中国、モンゴル)	梶　茂樹(ザイール、ケニア、ザンビア)
1987-1989	松村一登(フィンランド、ソ連)	宮崎恒二(オランダ、インドネシア)
1989-1991	林　　徹(中国、トルコ)	栗本英世(エチオピア、ケニア)
1991-1993	栗原浩英(ベトナム、ロシア)	峰岸真琴(インド)
1993-1995	新免　康(中国、独立国家共同体、イギリス)	根本　敬(イギリス、ビルマ)
1995-1997	飯塚正人(エジプト、イギリス)	黒木英充(シリア、フランス)
1997-1999	吉澤誠一郎(フランス、イギリス、中国、台湾)	西井涼子(タイ、イギリス)
1999-2001	澤田英夫(オーストラリア、インド)	本田　洋(韓国、イギリス)
2001-2003	床呂郁哉(スペイン、オランダ)	呉人徳司(アメリカ、ロシア)
2003-2005	陶安あんど(イギリス、フランス、中国)	太田信宏(イギリス、インド)
2005-2006	角谷征昭(タンザニア)	
2006-2008	河合香吏(ケニア、ウガンダ、スーダン、英国)	

競争的研究経費などによる研究

本研究所では、臨地研究、アジア・アフリカの言語文化に関する研究を展開し、また研究成果の情報化などをより一層推進する為に、「科学研究費補助金」や民間の財団による研究助成に積極的に応募して研究経費を獲得しています。

最近では、民間機関などと共同で行う研究プロジェクトが発足し、研究成果のより実践的な応用等にも貢献しています。以下で紹介するのは、所員が代表者になって行われている種々のプロジェクトです

■2006年度 科学研究費補助金プロジェクト

研究種目	所員名	課題名	採択期間
特定領域研究	内堀基光	象徴資源と生態資源への人類学的アプローチ	H14-H18
特定領域研究	クリスチャン・ダニエルス	知識資源の共有と秘匿	H14-H18
特定領域研究	小川了	小生産物(商品)資源の流通と消費	H14-H18
基盤研究A	黒木英充	新たな東地中海地域像の構築ー民族・宗派対立と人間移動	H16-H19
基盤研究A	宮崎恒二	高齢化社会と国際移住に関する文化人類学的研究：東南アジア・オセアニア地域を中心に	H17-H20
基盤研究A	内堀基光	フィールドワークの理論と手法に関する総合調査：海外学術調査の展開をとおして	H18-H21
基盤研究A	三尾裕子	東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究	H16-H19
基盤研究A	ペーリ・バースカララーオ	南アジア・東南アジア地域少数民族言語の語彙・文法調査	H17-H19
基盤研究A	飯塚正人	9.11後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究	H18-H21
基盤研究B	永原陽子	「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究	H16-H18
基盤研究B	呉人徳司	複統合性をめぐる北東シベリア・北アメリカ先住民言語の比較研究	H16-H18
基盤研究B	豊島正之	多言語辞書データベースに基づくキリシタン文献対訳辞書類の語彙体系の統合的研究	H17-H18
基盤研究B	新谷忠彦	言語・文化調査に基づくパラウン史の解明	H17-H20
基盤研究B	中山俊秀	北米先住民諸語自然談話テキスト資料の体系的収集	H18-H20
基盤研究B	菅原純	近現代テュルク諸語文献を中心とする内陸アジア歴史資料リソースの構築	H18-H21
基盤研究B	近藤信彰	近世・近代ペルシア語文化圏における言語・民族・国家形成	H18-H21
基盤研究C	床呂郁哉	スールー海域世界におけるサマ語系民族集団の移動と越境に関する文化人類学的研究	H16-H19
基盤研究C	稗田乃	ナイル諸語の通時的研究ーナイル諸語比較語彙集の作成	H17-H20
基盤研究C	峰岸真琴	ミャンマー東北地方パラウン語の記述および使用状況の研究	H18-H19
基盤研究C	尾立要子	周辺からの共和主義：フランス海外領政策にみる共和主義の変容	H18-H20
若手研究B	荒川慎太郎	言語学・文献学的観点から見た西夏とチベットの相関についての基礎的研究	H16-H18
若手研究B	衣笠聡史	東アフリカ多民族共存地域における環境認識の比較研究	H17-H19
若手研究B	陶安あんど	中國古文字偏旁体系の構築	H17-H18
若手研究B	塩原朝子	バリ語(インドネシア)の形態、統語、意味にかかわる包括的研究	H17-H19
若手研究B	堀井聡江	エジプト民法の比較法的考察およびその社会・経済的インパクトに関する判例研究	H17-H19
若手研究B	新井和広	インド洋におけるアラブ(ハドラミー)のネットワークに関する基礎研究	H18-H20
若手研究B	青柳かおる	古典イスラーム・セクシュアリティー思想の現代的意義の研究	H18-H20
若手研究B	角谷征昭	ニハ語(タンザニア南西部)の記述と隣接言語との相関	H18-H20
若手研究B	伊藤智ゆき	19世紀中国語ー朝鮮語対音資料の音韻論的研究	H18-H19
若手研究B	丹菊逸治	ニヴフ民族の口承文学資料の再検討と生活史における位置づけの研究	H18-H20
萌芽研究	小田淳一	計量修辞学による文彩の情報学的分析	H18-H20
データベース(重点)	町田和彦	「言語学大辞典」データベース	H18

■2006年度 受託研究・受託事業プロジェクト

課題名	所員名	機関
人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業 「地域研究による『人間の安全保障学』の構築」	黒木英充	(独)日本学術振興会
言語間デジタルデバイド解消のための方策に関する研究	町田和彦	(独)科学技術振興機構

資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築
～象徴系と生態系の連関をとおして

人類社会は象徴系資源と生態系資源という連関する二つの基盤のうえに成り立っています。この連関の様相を実証的かつ理論的に解明する人類学の新たな統合領域を構築することによって、天然資源のみならず、人工的二次的物的資源、さらには無形の知的・文化的資源をも包含する広義の「資源」の分配と共有をもって人類社会の根底的機序とするという視座を確立します。この基本的視座の確立は、地域社会、国家、あるいは国家を超える広域の人間社会の変容および適応という動態過程を統一的に分析することを可能にします。逆にまた視座の有効性は、こうした動態分析によって保証されます。本領域は、人類学に新たな可能性を拓くとともに、現代世界の周辺における動態的局面の根底的解明を目指します。文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」として平成14年(2002)から5年間にわたり行なわれ、最終年度を迎える本研究の成果及び活動内容については、独自のホームページhttp://shigenjin.aa.tufs.ac.jp/にて公開しています。

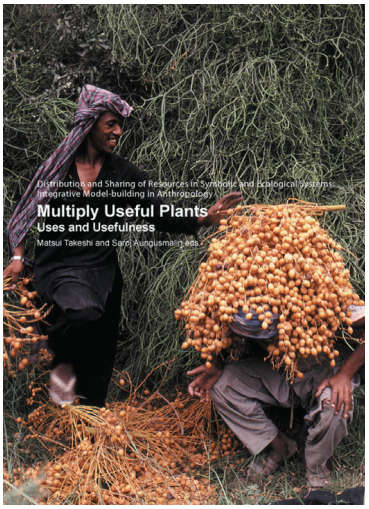
■計画研究

- □象徴資源と生態資源への人類学的アプローチ(総括班)
- □文化資源の生成と利用
- □知識資源の共有と秘匿
- □小生産物(商品)資源の流通と消費
- □贈与交換経済における貨幣資源の浸透
- □自然資源の認知と加工
- □生態資源の選択的利用と象徴化の過程
- □資源と生態史–空間領域の占有と共有
- □身体資源の構築と配分における生態、象徴、医療の相互連関

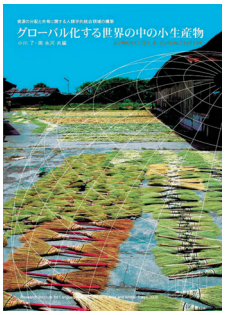
資源人類学
Distribution and Sharing of Resources in Symbolic and Ecological Systems:
Integrative Model-building in Anthropology

■定期刊行物

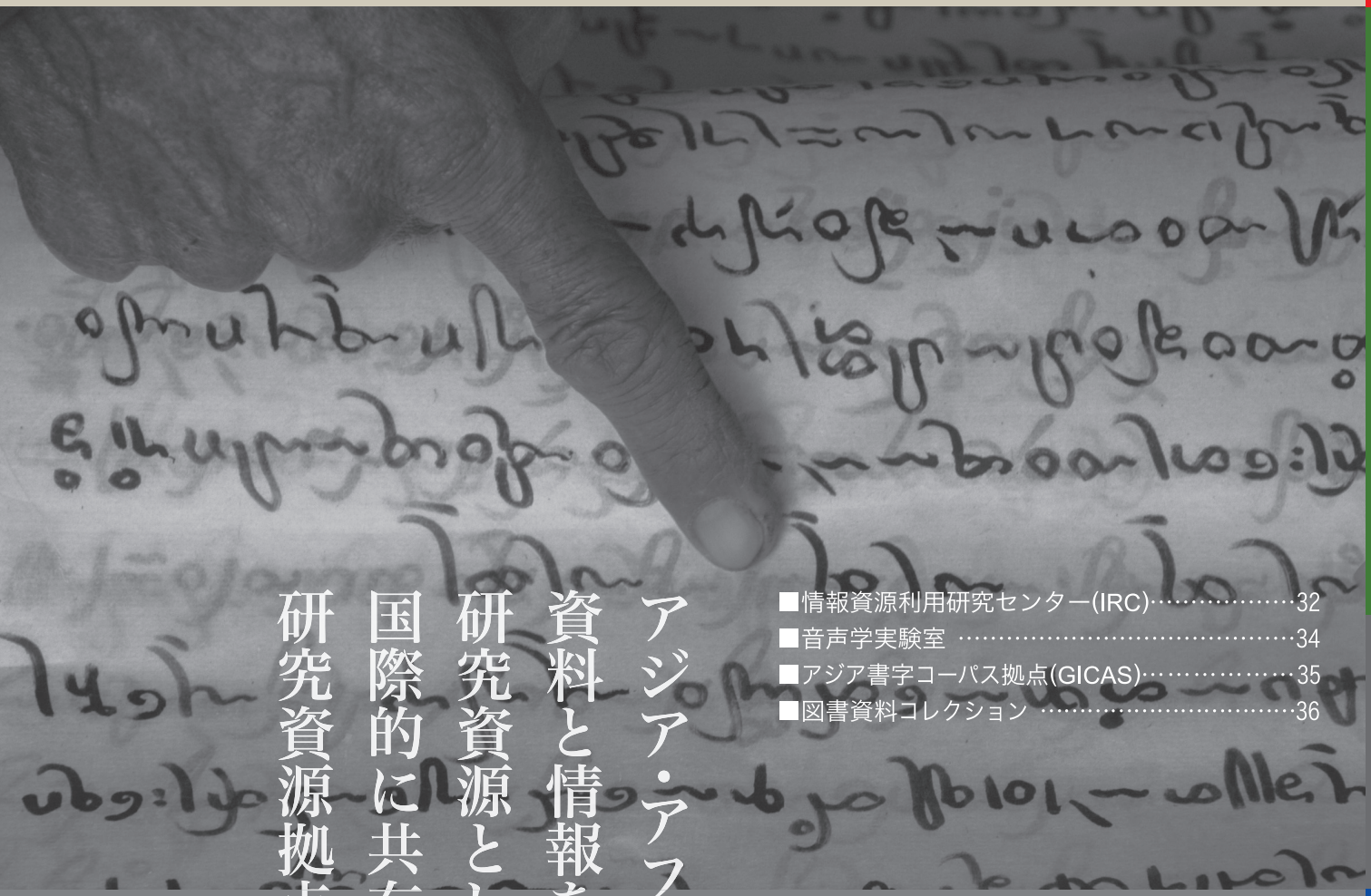
■シンポジウム



■出版物



研究資源拠点



アジア・アフリカ諸地域の
資料と情報を編纂し
研究資源として
国際的に共有するための
研究資源拠点としての活動

■情報資源利用研究センター(IRC)……32
■音声学実験室 ……34
■アジア書字コーパス拠点(GICAS)……35
■図書資料コレクション ……36

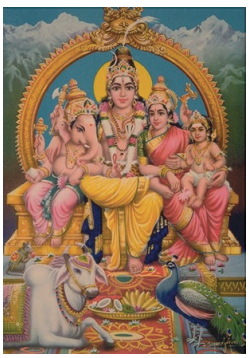
情報資源利用研究センター(IRC)

1. 設置目的

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター(Information Resources Center / ILCAA 略称 IRC-ILCAA)は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的として、平成9(1997)年度に設置されたものです。

2. 研究所とセンター

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論的分析をおこなうとともに、歴史学的・民族学的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。このデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカの諸言語の辞典・文典の編纂の基礎資料を提供し、かつ全国の研究者の共同利用に供されています。



デジタル言語文化館
「現代のヒンドゥーの神々」より
[上] マヒシャースラマルディニー
(水牛の姿をしたアスラを殺すドゥルガー神)
[左] シヴァ神の眷属

デジタル言語文化館「カイロの肖像・19世紀」より、「ナスル門とカイロの城壁」

3. 活動の指針

センターは、上記のようなこれまでの研究所の活動を基礎に、10年間で、下記の点で、理論・技術の整備・洗練をおこなうことをめざしています。

(1)アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開の場として

所内には、上記のような言語データだけでなく、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料(パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等)が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、公開に向けた整備を継続して行っています。

(2)国際的共同研究の場として

データベースを国際的に公開・共有し、それに基づく研究支援の環境をつくり、国際的共同研究の効率化と内容の充実を図ることをめざしています。

(3)コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体として

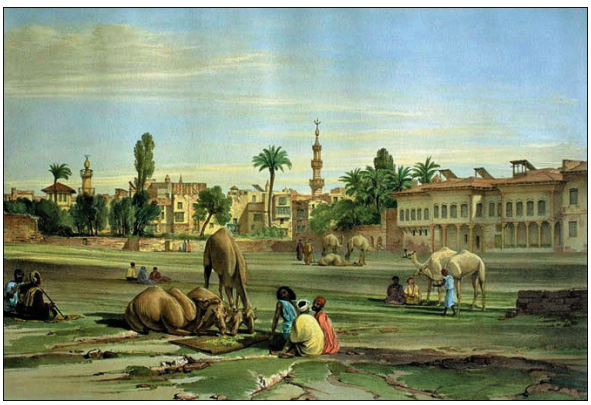
通時的文字論を考慮した文字コード(符号化文字集合)論、多言語処理論、多表記系(スクリプト)の照合(collation)・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備がほとんどない分野を理論化することは急務といえます。また、多表記系(スクリプト)混在でのinput methods、整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系でのinput methodsとインタフェースにも、今後積極的に関与していく予定です。

4. 今年度の主な研究事業

毎年度、センター運営費によるデータベース構築、言語文化研究の共同研究体制の強化、言語文化に関する一次資料の資源化のためのプロジェクトが企画・進行しています。これまでのプロジェクトの一例をあげると、「世界言語要覧プロジェクト」(代表：峰岸真琴)、「北米インディアン諸語音声」(代表：中山俊秀) のデジタル化、チベット語文献コーパスの構築 (代表：星泉) などがあります。

また、平成18年度の研究所ユニット体制の正式発足にともない、各ユニットと協同しての新たなプロジェクトを企画する予定です。

デジタル言語文化館「カイロの肖像・19世紀」より
「バイナル・カスラインと公共の給水泉」



デジタル言語文化館「カイロの肖像・19世紀」より、
「シャリーフ・ベイ宮殿の風景」

デジタル言語文化館「カイロの肖像・19世紀」より、「イブン・トゥールーン・モスクの大ミナレットと外側の一部」

5. デジタル言語文化館

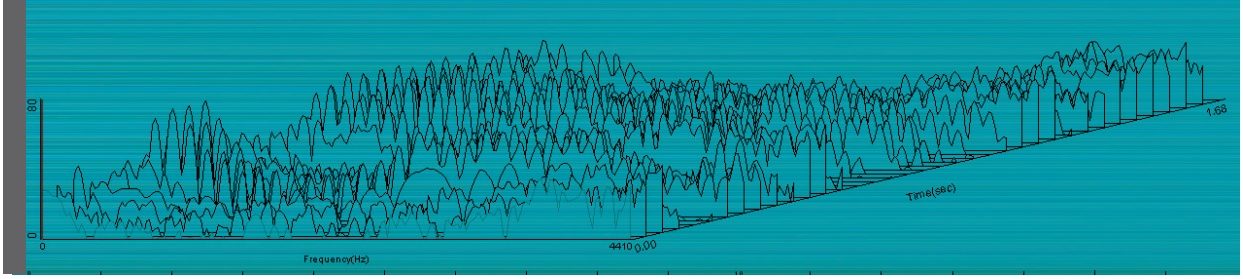
センターの研究活動の成果を世界に向けて発信するため、センターではインターネット上に「デジタル言語文化館」を開館しています。この「デジタル言語文化館」は、単なるコンテンツの羅列ではなく、その加工技術・呈示技術とその背景の理論化自体もコンテンツとなる点が特徴であり、蒐集展示と、蒐集資料・技術の工具利用の両方がおこなえるところが、従来のデジタルライブラリ (電子図書館) 発想を包含しつつ、それを越える点です。

コンテンツには「ヒンディー語形態素解析・辞書」「言語調査票」「カイロの肖像・19世紀」「ヒンディー語テキストコーパス」「チベット地図／人名・地名索引」など多数あります。今年度はコンテンツを充実させるためのプロジェクトを作り、活発に活動を進めていきますのでどうぞご期待ください。

6. 技術と研究の相互発展

センターは、望まれる技術の要求仕様を策定するのであって、技術自体を開発する場ではありません。望まれる技術とは、新しい技術の呈示によって技術への需要自体を呼びおこし、その結果、新たな研究工具を提供することで研究開拓のきっかけとなるような技術であり、すなわち、今は「技術的制約によって無理」と諦められ、研究分野自体が研究として認識されていないものを、明らかにするような技術を指します。

研究者の主体的発想による技術仕様の策定は、本センターのように、言語・歴史・民族・情報の各分野の専門研究者を擁し、技術と研究の相互刺戟を主眼として研究を進める専門機関によって、はじめて生れ得る成果と言えましょう。



音声学実験室

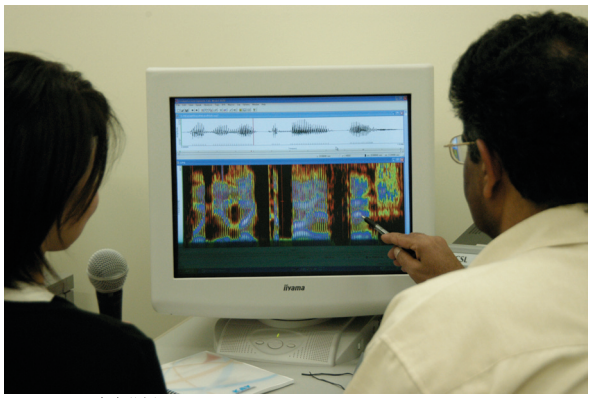
近代の音にかかわる科学、すなわち音声科学、音声学、音韻論等は音の物理量の測定と分析から始まり、その成果が現在の様々な理論に発展してきています。本研究所の音声学実験室は、このような音の基礎研究に関する分析や実験を行うための基本的な設備を備えています。

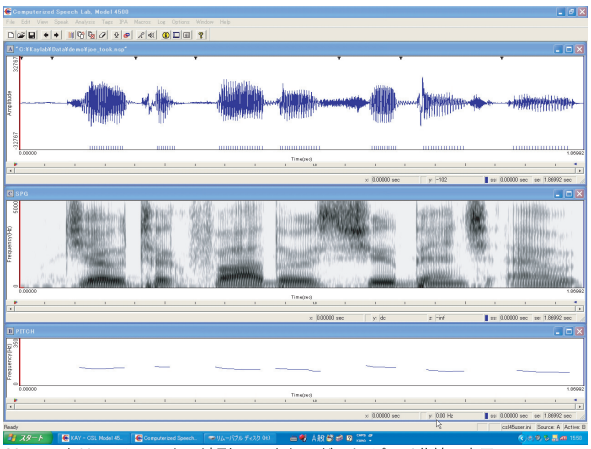
コンピュータ・スピーチラボ(CSL4500)は、多機能な発話信号分析機器です。音声などのアナログ信号を高品質にコンピュータに取り込み、スペクトログラム・フォルマント軌跡・LPC(線形予測符号化)周波数反応・FFT(高速フーリエ変換)パワースペクトル・LTA(長期平均)パワースペクトル・ケプストラム分析・ピッチ曲線分析・エネルギー曲線分析など、さまざまなタイプの分析を行うことができます。また、波形編集・チャンネル編集・時間編集・振幅編集などの基本的な編集機能や、記録・再生の機能も当然ながら有しています。さらに、リアルタイム・スペクトログラフ分析とリアルタイム・ピッチ分析を行うためのCSL専用ソフトウェアも利用可能です。この機器は、言語学的観点から見た発話音の様々な側面の分析を行うのに適切なものです。

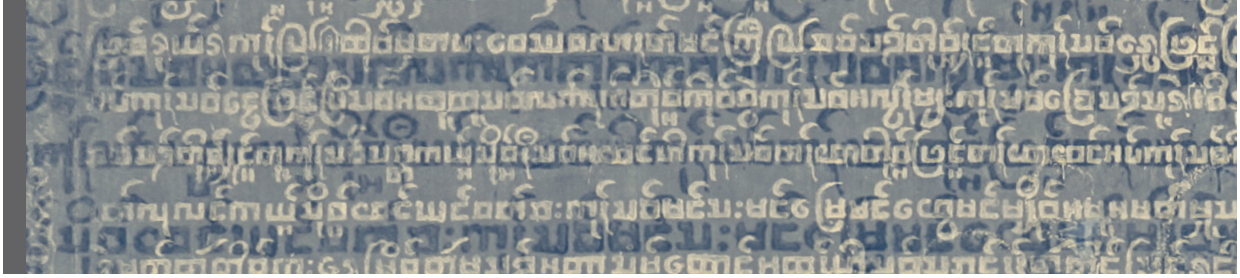
音声学実験室に備えられた音声・言語ライブラリには、所員をはじめとする研究者がフィールド調査を通じて収集してきた言語音・民話・民族音楽など貴重な録音資料および世界の様々な言語の録音ディスクやテープが保管されています。実験室にある分析機器・録音機器・メディア変換用機器などのハードウェアとソフトウェアには使用説明書が備えられ、利用者の便を図っています。

本研究所は、静かな環境で高品質の録音が可能な防音スタジオを用意しています。スタジオにある最新型のソリッドステートデジタル録音機を使用して、話者から直接発話サンプルを取得し、実験室の機器を用いてそれを分析することができます。

防音スタジオ


CSLを用いた音声分析のひとこま


CSLのスクリーンショット。波形・スペクトログラム・ピッチ曲線の表示。



アジア書字コーパス拠点(GICAS)

GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって平成13(2001)年〜17(2005)年度の5年度にわたり補助金を得て形成されてきた「COE研究拠点」の一つです。

GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築してきました。各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体現であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

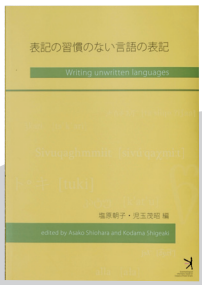
「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

5年間(平成13年〜17年度)の補助金助成が終了したGICASは、平成18(2006)年度より、名実ともにCOE拠点としてひとり立ちしました。研究面では、従来のプロジェクトを継承発展させるとともに、文字情報学の新しいパラダイムの展開に取り組んでいます。具体的には、科学研究費や委託研究費など新たに獲得した各種の競争的研究費による研究プロジェクトを核に研究を推進しています。

平成18(2006)年度よりGICASの本研究所内の組織的運営は、情報資源戦略研究ユニットが担当しています。

GICASは独自のインターネット・ドメインを取得済です。GICASのホームページはhttp://www.gicas.jp/で、そこにこれまでの研究成果などが公開されているので、是非ご参看ください。

KEYWORD IN CONTEXT INDEX OF THE Regras Gerays, Breves, & comprehensivas DA MELHOR ORTOGRAFIA (1666) BY BENTO PEREYRA.



表記の習慣のない言語の表記

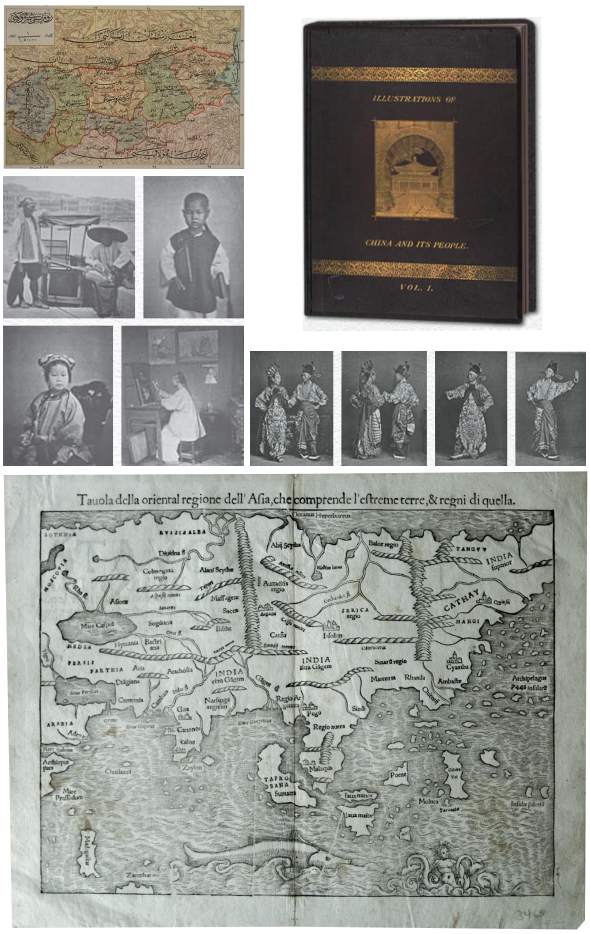
周縁アラビア文化の世界
ー規範と拡張 3

東南アジアのインド古典語碑文選

ペルシア語写本の世界

図書資料コレクション

本研究所は、全国共同利用研究所として、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964(昭和39)年の創設以来収集してきました。とくに海外約50カ国、150研究機関とのあいだで、寄贈・交換により資料を継続的に集めています。現在、その総数は、図書11万冊、雑誌約1,220タイトル、マイクロフィルム1万余リール、マイクロフィッシュ３千余に達していますが、このほかにも古文書、地図、写真、ヴィデオや、さらにはCD-ROMなどのあらたな媒体もふくまれています。カンボジア語版南伝大蔵経は、カンボジアの戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所蔵本をもとに複製版がつくられ、カンボジアの文化教育機関、寺院に寄贈されて、かの地の文化復興に貢献しました。また、浅井恵倫旧蔵資料(台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート、参考文献類)は、海外研究者の協力もえて整理が完了し、研究所ホームページで公開されるとともに、研究所で展覧会が開催され、内外研究者の関心を集めました。



16世紀前半の代表的な地図作者セバスチャン・ミュンスター(1488–1552)の作とされる「東アジア図」。最も早期のアジア地図の一つ。

書架を増設した文献資料室

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌:第２版」、19世紀「カイロ石版画集」コレクション、19世紀末からのイランの主要新聞65種、19世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、満洲国駐タイ公使館文書、日本の植民地官僚で京城帝国大学総長もつとめた篠田治策の文書など、貴重な文献資料がふくまれています。三浦周行旧蔵品もふくむ、朝鮮王朝古文書類コレクションや、清代公文書コレクションは、近年入手されたものですが、現在も継続して収集が続けられております。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫では、山本謙吾(満洲語研究)、浅井恵倫(オーストロネシア語研究)、小林高四郎(モンゴル史研究)、嶋信次(イスラーム研究)、王育徳(台湾語・文化研究)諸氏の蔵書が保管されています。

これらのコレクションのうち、一般図書、個人文庫類は附属図書館内に設置されたAA研コーナーに別置配架され、貴重書、辞書・辞典・目録を中心とした参考図書、大型本、叢書、マイクロフィルム類、そして雑誌は研究所棟の１階にある文献資料室で閲覧できます。とくに昨平成17年度には、文献資料室の書架を増設し、文献資料室の機能を大幅に強化いたしました。

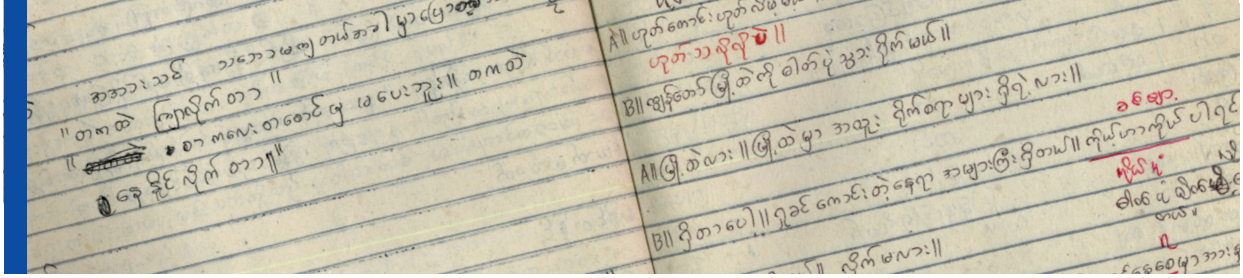
なお附属図書館AA研コーナーにある図書は、ほかの附属図書館蔵書と同様に、共同研究員、研究生も館外貸出しのサーヴィスをうけられます。国立国会図書館のアジア関係図書は、関西館新設にともない移転しましたが、その意味では、東洋文庫と並んで、関東地区におけるAA研図書資料コレクションの意義と役割は益々重要なものとなりましょう。

なお、AA研所蔵の図書資料の利用方法については、AA研のホームページhttp://www.aa.tufs.ac.jp/及び東京外国語大学附属図書館http://www.tufs.ac.jp/library/のホームページをご覧ください。

研究者養成のための教育・広報活動

国内外の後継研究者養成のための研修とプロジェクト

■言語研修……38
■大学院教育・日本学術振興会特別研究員……39
■出版物・ホームページ ……40
■研究成果の公開・社会還元……42



言語研修

本研究所では毎年、アジア・アフリカ諸言語の短期集中的な研修を実施しています。この言語研修は、次のような目的で行われるものです。

・アジア・アフリカ地域の研究を志す初学者に、基礎的な言語運用の訓練を行う。

・現地調査や文献研究を行うために必要な言語知識や言語調査の手法など、専門的な知識を教授する。

・学習環境が整っていない言語の教材を作成し研修を通じて改良を加えることで、基礎的な学習環境の整備に寄与する。

言語研修は、日本の専門研究者と母語話者とがいっしょに教授にあたる生きた言語教育である点を特徴としています。1974年度以降に研修を実施した言語は、右表の通りです。

実施にあたっては、語学教育に造詣の深い所外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、教授法、実施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。関西会場の研修のうち大阪で実施されるものは、大阪外国語大学の協力を得て行われます。

研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了書が授与されます。なお、本研究所は、名古屋学院大学及び清泉女子大学と単位互換協定を結んでおり、研修を修了すると、それぞれの大学の卒業単位として認定されます。

また、2006年度より東京外国語大学外国語学部および大学院地域研究研究科の開講科目となりました。

■研修言語名（修了者数）

年度	東京会場	関西会場
1974	朝鮮語(10)、チベット語(12)	
1975	カンボジア語(8)、ベンガル語(12)	
1976	ペルシア語(10)、スワヒリ語(9)	ビルマ語(5)
1977	広東語(14)、マラーティー語(6)	モンゴル語(18)
1978	タイ語(12)、トルコ語(12)	ペルシア語(13)
1979	ハウサ語(8)、ビルマ語(14)	タイ語(7)
1980	ネパール語(14)、モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1981	ヒンディー語(8)、パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12)、ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12)、フィンランド語(21)	パンジャーブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12)、ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14)、カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5)、タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10)、タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシャ語(10)、トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20)、ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11)、インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1991	エストニア語(12)、ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語(12)、アラビア語エジプト方言(15)	フィリピノ語(12)
1993	朝鮮語(17)、グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1994	ウォロフ語(9)、ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1995	アムハラ語(5)、チベット語(25)	上海語(12)
1996	タイ語(14)、現代ヘブライ語(12)	ヨルバ語(7)
1997	テルグ語(10)、モンゴル語(11)	ハンガリー語(7)
1998	アイヌ語(2)、ハヤ語(11)	カンナダ語(5)
1999	フィジー語(4)、ペルシア語(10)	ウルドゥー語(5)
2000	シャン語(3)、アフリカーンス語(6)	ペルシア語(4)
2001	パシュトー語(7)、福州語(10)	ムンダ語(3)
2002	ネワール語(8)、バリ語(7)	タイ語(7)
2003	マダガスカル語(11)、スンダ語(5)	ベトナム語(11)
2004	ビルマ語中級(6)、ベンガル語(11)	カザフ語(3)
2005	ベトナム語中級(4)、シンハラ語(3)	ヒンディー語(8)
2006	リンガラ語、サハ(ヤクート)語	朝鮮語中級

大学院教育・日本学術振興会特別研究員

大学院教育

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を1992（平成４）年度より設置しました。

本研究所では、教育体制のこうした発展に協力すべく、大学院地域文化研究科にAA研コースを設置し、22名（2006年度）の所員が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ、教育活動に従事しています。

これまで、本研究所の教員を主任指導教員として研究を行い、学位を取得した大学院生の氏名、論文題目、学位取得年月日は、以下の通りです。

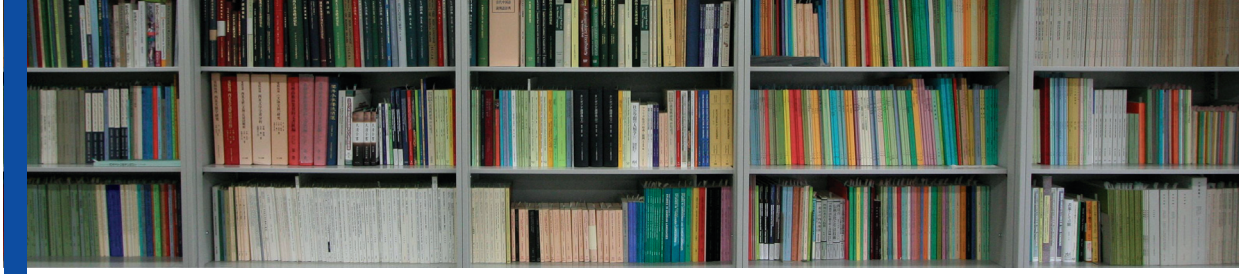
授与日	氏　名	学位論文題目	担当所員
1995.3.24	Ricard T. Jose	Food Administration in the Philippines during the Shortage and Occupation, 1942-1945: Focusing on the Rice Countermeasures	池端雪浦
1996.3.25	鈴木貴久子	マムルーク朝時代の料理書『日常食物誌』を中心とする アラブ・イスラーム世界の食生活研究	家島彦一
1998.3.26	吉枝聡子	現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究 ―テヘランの場合	上岡弘二
1998.4.22	Soysuda Naranong	日本語の終助詞「よ」・「ね」・「よね」について ―日本語教育の視点から	新谷忠彦
1999.3.26	榮谷温子	アラビア語における限定・非限定の意味と機能	中野暁雄
2000.3.24	米田信子	マテンゴ語の記述研究（バンツー系、タンザニア） ―動詞構造を中心に	梶茂樹
2000.6.21	小坂隆一	A Descriptive Study of the Lachi Language ― Syntactic Description,Historical Reconstruction and Genetic Relation	新谷忠彦
2002.3.26	鄧応文	1990年代における中越経済関係―国境貿易を中心にして	クリスチャン・ダニエルス
2002.3.26	高久由美	漢字形成史研究 ―先秦時代の漢字体系における「説文留文」の位置付け	中島幹起
2002.7.24	菅原由美	19世紀中部ジャワ宗教運動研究 ―アフマッド・リファイ運動をめぐる言説	宮崎恒二
2002.12.18	禅野美帆	村落と都市の紐帯 ―メキシコ、オアハカ州サン・マルティン村のカルゴ・システム	宮崎恒二
2003.3.26	Kari, Ethelbert Emmanuel	Clitics in Degema: A Meeting Point of Phonology, Morphology and Syntax.	梶茂樹
2003.3.26	黒澤直道	中国少数民族口頭伝承の研究 ーナシ（納西）語音声言語の検討による「トンバ（東巴）文化」の再検討	クリスチャン・ダニエルス
2006.2.8	李敬淑	発話速度と促音の生成に関する音響音声学的研究	加賀谷良平
2006.2.8	阿部優子	ベンデ語（バントゥF, 12, タンザニア）の記述研究―音韻論、形態論を中心に―	梶茂樹

日本学術振興会特別研究員

本研究所では、大学院博士課程修了者で、優れた研究能力を持つ若手研究者を、「日本学術振興会特別研究員（PD）」として受け入れ本研究所の教員と共同研究を推進しています。平成18年度、本研究所に在籍する特別研究員は右表の通りです。

諸外国の博士号取得直後の若手研究者を最長２年間受け入れ、所員と共同研究を行っています。

氏　名	資 格	研究指導者	採用年度
井上 さゆり	PD	根本 敬	H16～
児島 康宏	PD	ペーリ・バースカララーオ	H18～
溝口 大助	PD	真島 一郎	H18～



出版物／ホームページ

■出版物

2005年度よりアジア・アフリカ言語文化研究（通称：ジャーナル）のデザインをリニューアルしました。表紙デザインは、グラフィックデザイナー杉浦康平氏によるものです。

本研究所では、言語研修、辞典編纂事業、個人研究、および共同研究プロジェクトを通じたさまざまな研究成果を、民間と共同で編集したものも含め、数多く出版して公開しています。また、著作者からの事前の文書による了解が得られているものに限り、「オン・デマンド出版」による頒布を行う準備を進めています。出版物の一覧は、本研究所ホームページの中の「研究所の刊行物」欄でご覧になることができます。URLは http://www.aa.tufs.ac.jp/book/book.html です。

お問い合わせは、出版事務担当　(publ@aa.tufs.ac.jp) までお願いいたします。

■2006年度編集委員会委員

上岡弘二 (東京外国語大学・名誉教授)
梶　茂樹 (京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授)
鷹木恵子 (桜美林大学・国際学部・教授)
土田哲夫 (中央大学・経済学部・教授)
新免　康 (中央大学・文学部・教授)
石川　登 (京都大学・東南アジア研究所・助教授)

□逐次刊行物

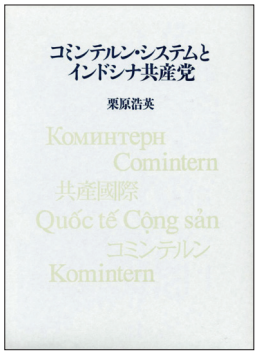
学術雑誌『アジア・アフリカ言語文化研究』(Journal of Asian and African Studies) を年に２回発行しています。所外の研究者も含む編集委員会によって運営され、毎号、査読を経た水準の高い言語学・歴史学・文化人類学に関する論文が掲載され、国内外から高い評価を得ています。

またAA研ニュースレター『通信』を年に３回発行しています。

表紙「通信」の題字は、初代所長を務めた岡正雄（在任1964〜72年）の筆によるものです。

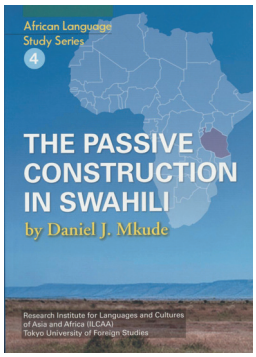
□アジア・アフリカ言語文化叢書

本研究所を代表する知的成果を誇る出版物です。内外の査読を経て、年に１－２点ずつ出版されています。

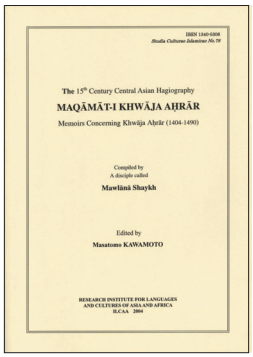


アジア・アフリカ言語文化叢書41

□地域・文化研究「東アジア」
□地域・文化研究「東南アジア」
□地域・文化研究「南アジア」
□地域・文化研究「西アジア」
□地域・文化研究「アフリカ」
□地域・文化研究「その他の地域」
□地域・文化研究「広域」



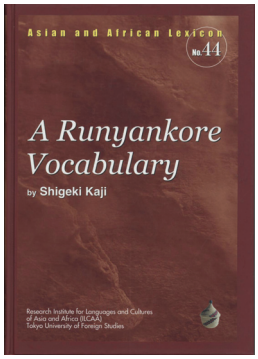
地域・文化研究「アフリカ」
African Language Study Series 4



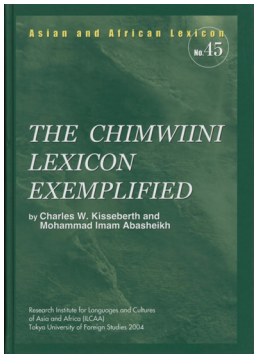
地域・文化研究「西アジア」
イスラム文化研究シリーズ78

□アジア・アフリカ基礎語彙集

アジア・アフリカのさまざまな地域で実施された言語調査を元に作成された語彙集で辞典編纂の基礎情報となるものです。



基礎語彙集44



基礎語彙集45

□言語研修テキスト

本研究所が毎年開催する夏期言語研修で使用したテキストです。将来のよりよき教材作成のための材料としても生かされます。

□言語調査・語学教育関連資料
□言語情報処理

■ホームページ

本研究所では、平成６年度からホームページを開設しています。本研究所の研究会の案内や研究活動の詳細、研究成果の出版物一覧など、最新の情報を提供しています。どうぞご一覧ください。なお、個々の所員によるホームページも本研究所のホームページからアクセスできます。また、本要覧43〜48ページにある「研究スタッフ」欄に掲載されたアドレスもご参照ください。

ホームページのアドレス：http://www.aa.tufs.ac.jp/

研究成果の公開・社会還元

本研究所は創立以来、全国共同利用研究所として、国内の研究機関に所属する専門研究者に設備や資料を提供する一方、共同研究プロジェクト等の開催を通じて研究交流の機会を作り、日本における当該分野の研究進展に大きな足跡を残してきました。しかし、国際化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教対立の激化など、国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積に対する一般社会の期待は年々大きくなっています。そこで、本研究所もこのような期待に応えるために、研究とともに、「教育」型の社会還元を実施しています。2005年度以降に実施した公開講座・展覧会は以下の通りです。

■公開講座の実施（2005年度）

□国分寺市国際協会主催 第37回国際理解講座「インドネシアの文化と人々」（講師：塩原朝子）

□ハーバード大学主催 The Sanskrit and Indian Studies Department Lecture Series
（全２回、講師：ペーリ・バースカラーラオ）

□東海大学主催 知のコスモス講演会シリーズ博物学への招待
「『天工開物』に見える製糖技術」（講師：クリスチャン・ダニエルス）

□鹿児島大学総合研究博物館主催 第９回市民講座「山地に暮らす人々―その歴史と文化」（講師：クリスチャン・ダニエルス）

□国際交流基金アジア理解講座「言語文化の十字路ネパール」（講師：石井溥）

□アジア理解講座「現代ミャンマーを知ろう」（第３回）「軍政とNLDー遠のく民主化」（講師：根本敬）

□2005年度早稲田大学オープンカレッジ『宗教の世界を垣間見る』（全２回、講師：飯塚正人）

□明治大学人文科学研究所主催 公開文化講座「生と死」の東西文化論「イスラーム思想における生と死」（講師：飯塚正人）

□山口県他主催 中東・イスラーム理解セミナー in 山口「イスラームとは何か」（講師：飯塚正人）

□ル・ヴェルジェ高校（レユニオン）主催
Cours invité de civilisation japonaise “La Réunion vue du Japon”（講師：小田淳一）

□成城大学公開講座「イスラーム世界の／と民族」（講師：大塚和夫）

■展示会の実施（2002～2005年度）

□2002年6月～8月　『アジア文字曼陀羅～インド系文字の旅』

□2004年2月　『アサバスカン・リバイバル』

□2004年11月～12月『アラビア文字の旅』

□2005年3月～4月　『臺灣資料 テキスト・音・映像で見る台湾
一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として』

研究スタッフ（2006年4月現在）

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

教　授

大塚　和夫 *OHTSUKA, Kazuo*	
1	社会人類学、中東民族誌学
2	中東を中心としたムスリム社会の人類学的研究
	共同研究プロジェクト 「ムスリムの生活世界とその変容」

小川　了 *OGAWA, Ryo*	
1	西アフリカの民族学
2	アジア・アフリカにおける小生産物の研究

栗原　浩英 *KURIHARA, Hirohide*	
1	ベトナム現代史
2	ベトナム・中国関係の歴史的変遷(1950年ー現在)
	インターナショナリズムの史的研究

クリスチャン・ダニエルス *DANIELS, Christian* 漢名:唐立	
1	中国西南部：タイ文化圏の歴史
2	タイ文化圏における山地民の歴史的研究 ー総合的概念を確立するめの手法開発 プロジェクト(AA研共同研究プロジェクト)
	雲南におけるタイ文字文献の調査と保存 プロジェクトー臨滄地区(トヨタ財団)
	知識資源の共有と秘匿 (特定領域科学研究費補助金)
	雲南歴史班ーアジア熱帯モンスーン地域に おける地域生態史の総合的研究」 (総合地球環境学研究所研究プロジェクト)

黒木　英充 *KUROKI, Hidemitsu*	
1	中東地域研究・東アラブ近代史
2	オスマン期シリアの都市社会の変容過程に関する 基礎研究
	東地中海地域における人間移動と民族・宗派対立 (科学研究費補助金・AA研共同研究プロジェクト)
	地域研究による「人間の安全保障学」の構築 (日本学術振興会委託研究)
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/

芝野　耕司 *SHIBANO, Kohji*	
1	マルチメディアデータベース、多言語情報処理、CALL
2	マルチメディアデータベース言語設計、日本語組版、 コンピュータ支援による言語教育環境及び e-learning環境の研究

新谷　忠彦 *SHINTANI, Tadahiko L. A.*	
1	言語音変化の類型的研究
2	タイ文化圏の総合的研究

高島　淳 *TAKASHIMA, Jun*	
1	宗教学・インド宗教史（ヒンドゥー教）、言語情報処理
2	シヴァ教の寺院儀礼と思想についての研究
	多言語処理システムの開発研究
	インド聖典データベースの構築
	インド系文字の発展に関する研究
	中世インドのヒンドゥー教タントリズムと 諸宗教のかかわりについての研究
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/index.html

中谷　英明 *NAKATANI, Hideaki*	
1	インド仏教学・中期インド語学・総合人間学
2	インド古典文献学：インド古典語・中期インド語・ インド古典韻律の研究
	インド古代思想研究： バラモン教・インド仏教の哲学的・思想的解明
	総合人間学：地球文明時代の世界理解と新しい倫理・ 人間観の研究(AA研共同研究プロジェクト)
	http;//www.classics.jp

研究スタッフ（2006年4月現在）

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

教　授

中見　立夫 *NAKAMI, Tatsuo*

1	東アジア・内陸アジアの国際関係史
2	「東アジアの社会変容と国際環境」プロジェクト（AA研共同研究プロジェクト）
	台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵満洲語文書の研究（中央研究院歴史語言研究所）
	近代東アジア国際関係史の研究（プリンストン高等研究所）

根本　敬 *NEMOTO, Kei*

1	ビルマ近現代史
2	「日本占領期ビルマ（1942–45年）に関する総合的歴史研究」（AA研共同研究プロジェクト・トヨタ財団計画助成研究）主査としての成果刊行物出版準備
	「ビルマ地誌データベース」構築への取り組み
	ビルマ・ナショナリズムの展開（GCBA、タキン党、日本占領期）に関する継続的史料調査
	英系ビルマ人の戦争の記憶に関する研究

羽田　亨一 *HANEDA, Koichi*

1	サファヴィー朝期イラン文化史
2	『ロスタム・ハーン史』の研究
	ラシードゥ・ウッディーン序・監修『タンスーク・ナーメ』（王叔和『脉訣』のペルシア語訳本）の研究
	「ペルシア語文化圏に於ける文字資料の収集と収集資料のデジタル化」（GICAS）

稗田　乃 *HIEDA, Osamu*

1	アフリカの言語学
2	ウガンダのナイル諸語の調査と記述
	ナイル諸語比較語彙集の作成（科学研究費補助金）
	ドイツに保存されているナイル諸語資料の収集と整理

深澤　秀夫 *FUKAZAWA, Hideo*

1	マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
2	マダガスカル北西部農村における共有資源の管理と配分をめぐる実地調査（科研費）
	特定領域研究『資源人類学』小商品班の論文の執筆
	ホームページの改訂
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/

ペーリ・バースカララーオ *BHASKARARAO, Peri*

1	南アジアの諸言語、音声学
2	南インド、ニルギリ地域の諸言語研究
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~bhaskar/index.html

町田　和彦 *MACHIDA, Kazuhiko*

1	南アジアの言語学
2	ヒンディー語電子辞書（GICAS）
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/

峰岸　真琴 *MINEGISHI, Makoto*

1	東南アジア、南アジアの言語学および言語類型論
2	孤立語を視野に入れた言語基礎論・言語類型論の研究
	コミュニケーションとその障害に関する研究
	東南アジアの少数民族言語の研究
	言語運用を基盤とする言語情報学拠点（東京外国語大学21世紀COEプログラム）
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/index-j.html

宮崎　恒二 *MIYAZAKI, Koji*

1	オーストロネシア社会
2	国際移住に関する文化人類学的研究（科学研究費補助金）
	インドネシア文献学の研究
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmiya/profile-sjis.html

助教授

飯塚　正人 *IIZUKA, Masato*	
1	イスラーム学・中東地域研究
2	9.11後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究(科学研究補助金)
	地域研究による「人間の安全保障学」の構築(日本学術振興会人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業)
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~masato/intro_me.html

小田　淳一 *ODA, Jun'ichi*	
1	計量文献学
2	民話の計量的比較研究
	情報修辞学
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/index.html

河合　香吏 *KAWAI, Kaori*	
1	人類学、東アフリカ牧畜民研究
2	東アフリカ牧畜民の遊動再考
	自然観・環境認識と身体論(AA研共同研究プロジェクト成果の編集出版)
	「集団」概念の進化史的基盤研究(AA研共同研究プロジェクト)

呉人　徳司 *KUREBITO, Tokusu*	
1	言語学、チュクチ語
2	海岸チュクチとトナカイ・チュクチに関する言語学、言語人類学的研究
	消滅の危機に瀕している言語に関するより効率的な調査・記述方法の研究
	言語類型論の研究
	複統合性をめぐる北東シベリア・北アメリカ先住民言語の比較研究(科学研究費補助金)
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/

近藤　信彰 *KONDO, Nobuaki*	
1	イラン近代史
2	宗教寄進文書の分析による19世紀テヘランの都市史研究
	シーア派の法的勧告と法廷文書に関する研究
	近世・近代ペルシア語文化圏における言語・民族・国家形成

澤田　英夫 *SAWADA, Hideo*	
1	カチン州および東北インドのチベット＝ビルマ系言語の記述的研究
2	ロンウォー(マル)語の文法記述
	「東南アジア諸文字の源流と発展」(GICAS)の調査で得た東南アジア大陸部インド系文字碑文画像データの整備
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/

塩原　朝子 *SHIOHARA, Asako*	
1	言語学、インドネシア諸言語の記述的研究
2	ヌサトゥンガラ諸島の言語(バリ語、スンバワ語、クイ語(アロール)など)の記述
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/profile-sjis.htm

陶安　あんど *SUEYASU/HAFNER, Arnd Helmut*	
1	法社会学、中国法制史と中国古文字学
2	秦漢刑罰体系の研究
	金文法制資料の研究
	中国古文字偏旁体系の研究

高知尾　仁 *TAKACHIO, Hitoshi*	
1	文化人類学・人類学精神史
2	ジェイムズ・フレイザー研究
	モダニティの表象
	imperium の言説と表象に関する基本研究

研究スタッフ (2006年4月現在)

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

助　教　授

床呂　郁哉 *TOKORO, Ikuya*	
1	東南アジア島嶼部の人類学
2	真珠を含む小生産物の研究
	スールー海域世界に関する歴史人類学的研究

豊島　正之 *TOYOSHIMA, Masayuki*	
1	中世日本語文献学 (特にキリシタン文献)
2	キリシタン文献活字字体のデータベース構築・維持
	宣教に伴う言語学 (Missionary Linguistics) 関連辞書・文法書統合化研究 (科学研究費補助金)
	漢字字体史研究のための関連資料研究 (GICAS)
	極初期録音音源による百年前の言語音声と書記記録との関係の研究 (GICAS)
	三省堂「言語学大辞典」データベース構築 (科学研究費補助金)
3	http://www.joao-roiz.jp/mtoyo/

永原　陽子 *NAGAHARA, Yoko*	
1	南部アフリカの歴史、帝国主義・帝国の歴史
2	南部アフリカ史における「クレオール」・「人種」・「境界」・「ジェンダー」の研究
	植民地時代のナミビア史の再構築
	「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究 (AA研共同研究プロジェクトおよび科学研究費補助金)

中山　俊秀 *NAKAYAMA, Toshihide*	
1	ワカシュ諸語 (北米北西海岸)、形態・統語論、言語類型論
2	複統合性についての研究
	ヌートカ語テキスト資料の整理・分析・編集
	ヌートカ語語彙集の編集
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~nakayama/

西井　涼子 *NISHII, Ryoko*	
1	東南アジア大陸部の人類学
2	タイにおけるマイノリティとしてのムスリム研究
	フィールドワークについての人類学的研究
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~rnishii/

星　　泉 *HOSHI, Izumi*	
1	チベット文化圏の言語学
2	現代チベット語文法研究
	チベット語辞典編纂 (GICAS)
	古代チベット語テキスト研究 (GICAS)
3	http://star.aa.tufs.ac.jp/

真島　一郎 *MAJIMA, Ichiro*	
1	西アフリカの人類学
2	中間集団論の研究
	マルセル・モース研究
	ダン族の邪術研究
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/profile.html

三尾　裕子 *MIO, Yuko*	
1	東アジアの人類学
2	台湾漢人の社会変動と宗教についての研究
	台湾における植民地主義に関する研究 (科学研究費補助金)
	ベトナム華人研究及び「環中国海 (環シナ海) の文書史料の電子化 (GICAS)」
	「中国系移民の土着化/クレオール化/華人化についての人類学的研究」 (AA研共同研究プロジェクト、科学研究費補助金)
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/

助　手

新井　和広 ARAI, Kazuhiro	
1	中東研究、インド洋史
2	20世紀前半に東南アジアで発行されていたアラブ定期刊行物データベースの構築
	マナーキブを通して見たハドラミー移民の諸相に関する研究

荒川　慎太郎 ARAKAWA, Shintaro	
1	西夏語学、西夏語文献学
2	西夏語文献の言語学的研究
	チベット語から翻訳された西夏語仏典の研究（科学研究費補助金）

伊藤　智ゆき ITO, Chiyuki	
1	音韻論、歴史言語学、中期朝鮮語、中国語中古音
2	朝鮮漢字音の音韻研究
	朝鮮語真言・陀羅尼資料の分析
	東京大学小倉文庫所蔵朝鮮語文献の電子化（GICASプロジェクト）
	中期朝鮮語アクセント辞典作成（科学研究費補助金）

太田　信宏 OTA, Nobuhiro	
1	南アジアの歴史
2	近世南アジアにおける国家的儀礼と政治文化の研究
	南インド史上の諸社会集団の結合形態とその歴史的変遷の研究
	カンナダ語文学史に関する基礎的研究

椎野　若菜 SHIINO, Wakana	
1	社会人類学、東アフリカ民族誌
2	寡(やもめ)の処遇とその生活実践に関する研究
	居住集団と居住形態に関する研究
	生業活動、物質文化（壺づくり）とジェンダーに関する研究

非常勤研究員

丹菊　逸治 TANGIKU, Itsuji	
1	サハリン・アムール地域および北海道の口承文学
2	サハリン地域のニヴフ民族の昔話・叙事詩研究、その世界観、周辺諸民族との影響関係
	アイヌ民族を中心とする極東諸民族の民具名称、動植物語彙の調査
	サハリン地域の民族音楽アンサンブル運動研究

長崎　郁 NAGASAKI, Iku	
1	言語学、ユカギール語
2	コリマ・ユカギール語の文法記述
	コリマ・ユカギール語資料の整理、分析

堀井　聡江 HORII, Satoe	
1	近現代エジプトの社会・経済的コンテクストにおけるエジプト民法典の比較法的研究―判例分析を基に
2	破毀院判例に照らしたエジプト民法典への先買権（シュフア）導入および同制度の機能についての歴史的考察

石井　洋子 ISHII, Yoko	
1	社会人類学、アフリカ民族誌学
2	東アフリカ農耕民社会における開発と文化をめぐる人類学的研究
3	http://ykoishii.hp.infoseek.co.jp/

角谷　征昭 KADOYA, Masaaki	
1	バンツー諸語
2	マリラ語とニハ語（タンザニア）の記述および対照研究

衣笠　聡史 KINUGASA, Satoshi	
1	生態人類学、空間情報科学
2	アジア・アフリカ地域の人間活動と環境変化
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~kinugasa/

研究スタッフ（2006年4月現在）

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

非常勤研究員

菅原　純（産学官連携研究員）　*SUGAWARA, Jun*	
1	中央アジア史(19–20世紀中国領中央アジア/新疆史)
2	省制期新疆一般契約文書史料(テュルク語)に依拠した19–20世紀カシュガル、ホタンの社会状況、イスラーム聖者廟(マザール)文書、新疆テュルク諸語歴史文献に関する書誌、現代ウイグル人の言語文化など。
3	http://www.uighur.jp

中国四川省・成都、杜甫草堂内部の碑
撮影者：澤田英夫

インドネシア、家船で移動するサマ(バジャウ)人の家族。
撮影者：床呂郁哉

客員研究員

＊は出身国と着任期間を表す

SEFATGOL, Mansur（マンスール・セファトゴル）	
1	歴史学
2	サファヴィー朝期イランのペルシア語写本・文書史料の研究
＊ イラン　2005.9.1－2006.8.31	

KEDIT, Peter Mulok（ピーター・ムロック・ケディット）	
1	社会文化人類学
2	マレーシア・サラワク州在住のイバン住民社会における移動と現代化
＊ マレーシア　2005.9.1－2006.8.31	

BRENZINGER, Matthias（マティアス・ブレンツィンガー）	
1	アフリカ言語学、アフリカ史
2	アフリカにおける危機言語問題
＊ ドイツ　2005.9.1－2006.8.31	

PUDJIASTUTI, Titik（ティティク・プジアストゥティ）	
1	インドネシア文献学、歴史学
2	ババッド・アルン・ボンダンの文献学的・歴史学的研究
＊ インドネシア　2005.9.1－2006.8.31	

SUBBARAO, Karumuri Venkata（カールムーリ・ヴェンカタ・スッバラウ）	
1	言語学
2	テルグ語の文法的分析
＊ インド　2005.9.1－2006.8.31	

予算（2006年4月現在）

■2006年度予算額（運営費交付金）※常勤人件費除く

（単位：千円）

運営費交付金	下記以外		158,948
	特別教育研究経費	中東イスラーム教育研究プロジェクト事業経費	63,644
		アジア・アフリカの言語文化に関する共同研究	33,590
	学内プロジェクト	文献資料等の保全・整備プロジェクト	9,519
補助金間接経費（AA研配分額）			8,010
計			273,711

■2006年度予算内訳

（単位：千円）

事　項	配分額	内　容
個人研究費	8,405	個人研究費
客員研究費	2,660	外国人研究員研究費
ユニット経費	7,525	ユニット研究費
ＩＲＣ経費	34,500	ＩＲＣ経費、共同利用設備
ＦＳＣ経費	36,144	ＦＳＣ経費
言語研修経費	10,400	言語研修、新型言語研修
辞典編纂経費	1,310	インフォーマント調査
成果刊行経費	23,010	ジャーナル、要覧、通信、叢書、基礎語彙集、共同研究プロジェクト出版物、編集委託費
プロジェクト経費	17,950	共同研究プロジェクト研究旅費、短期共同研究員
文献資料経費	10,000	図書関係資料、文献資料
文献資料整備経費	3,900	国際研究集会開催経費、国際研究集会招聘帰国・派遣旅費
国際研究集会経費	9,519	文献資料製本等
未開発言語文化派遣経費	3,000	未開発言語文化派遣、中東・イスラーム関係未開発派遣
展示等経費	4,000	展示会、展示室有効利用費用
共通経費	9,010	共通経費（消耗品、各種修理代、出版物発送代　等）
外部委員経費	2,700	運営諮問・共同利用・専門委員会、編集委員会
会議等経費	1,000	会議等出席旅費等
所長裁量経費	2,900	
非常勤研究員人件費	22,000	
外国人研究員人件費	49,078	
ＲＡ経費	800	リサーチアシスタント給与
派遣職員経費	12,900	所長秘書、全国共同利用係派遣職員、GICAS派遣職員
予備費	1,000	
合　　計	273,711	

予算 (2006年4月現在)

■2006度外部資金受入額

科学研究費補助金	
特定領域研究	37, 300千円／3件
基盤Ａ (海外、一般含む)	44, 900千円／6件
基盤Ｂ (海外、一般含む)	23, 700千円／7件
基盤Ｃ	4, 600千円／3件
萌芽研究	900千円／1件
若手研究	12, 500千円／10件
データベース科研	13, 500千円／1件

受託研究費・受託事業費
23, 145千円／2件
寄付金（新規受入分のみ）
0件

計	160, 545千円／33件

■歳出決算額(国立学校特別会計・運営費交付金・施設整備費補助金)

（単位：千円）

区分		2003年度	2004年度	2005年度
人件費	(項) 国立学校		525, 000	525, 000
	(項) 研究所	463, 700		
	その他	1, 700		
物件費	(項) 国立学校	8, 200	231, 000	231, 000
	(項) 研究所	265, 300		
	その他	36, 600		
施設整備費	大型特別機械整備費		0	0
	施設費	3, 800		
補助金間接経費 (AA研配分額)		10, 905	26, 550	19, 980
計		790, 205	782, 550	775, 980

アンコール遺跡の主要な構造材料であったラテライト石材。カンボジア・アンコール遺跡群・プレ・ループにて。撮影者：高坂香

蓮。タイ王国アユタヤの町のとある民家の玄関先にて。撮影者：高坂香